～ちょっと非道なアニキと健気っ子♀拓のお話集～

拓♀本

BOSS-PAN　Web再録

*夜の橋……　4p

*花霞……46ｐ
・いちご大福…80ｐ
・花拓く……82ｐ

夜の橋

気が付くと橋の上に立っていた。
よく見かけるコンクリート造りの橋じゃない。
時代劇などで見かけるような、木で出来たアーチを描く橋。
橋の入口には柳。
下を流れる川は、何故か見えない。
真っ白な靄が橋の下を覆っている。
時代めいた木の橋。その欄干に触れてみると、思ったよりも暖かい。
きっちりと組まれた木の橋には、釘の一本すら見当たらなかった。
いったいどうやって作ったのだろうと覗き込むと、横を慌しく走っていく音。
ああ、忙しい忙しい」
トントンと軽やかな木の立てる足音。
顔を上げ、走り去っていく後姿を眺め、ぎょっとした。
烏帽子を被った公家装束を纏った服装にではなく。
その、子供としか思えない背にではなく。
ヒョロリと、お尻の辺りから零れているフサフサの尻尾にだ。
思わず息を飲むと、走っていた「もの」が立ち止まり振り返った。
その顔は予想通り人間ではない。髭の生えた狐。
おやおや、この橋に来るとは…。とんだ迷子だ」
ケタケタと狐は笑い、すぐに興味を失ったようにまた 忙しい忙しい」と走り出す。
あれは人間ではなかった。
そして、よく考えればこの場所も、現実味の薄い場所。
自分は今どこにいるのだろう？
夢だろうか？
それとも…。
瞬間、頭がキリと痛む。
眉を顰め、頭に手を遣ると、そこに感じたのは包帯の感触だった。
「ケガ…？」
ズキズキというより、頭がヒリヒリ痛む。
ぶつけたというよりも、どうも擦り剥いた時の痛みに近い。
ケガなんかしただろうか？
考え込むと、ふと、脳裏にスキール音が甦る。
ギュキィィと軋むタイヤと擦れたゴムの匂い。
けど、あれは……。
思い出そうと、目を閉じ記憶を辿る。
けれど、川の下を流れる靄のように、頭に霞がかかってはっきりしない。
いったい自分に何があったのだろうか？
考えようと、また目を閉じようとした瞬間、ふわりと懐かしい匂い

が鼻腔に届く。
思わず、目を開き顔を上げると、目の前にきれいな女の人がいた。
絽の着物を着た、懐かしい人。
にっこりと微笑み、彼女は呼んだ。
「拓海」
名を。
拓海もまた、彼女を呼んだ。
「…お母さん」
それは小さい頃に別れたきりの母親の姿。
最後に見た、彼女の顔には白い布がかかっていた。
もう二度と会えないのだと、そう思っていた母が目の前にいる。
拓海は母に飛びついた。
記憶の中では大きいと思っていた母は、今は自分より背が小さい。
こんなに華奢だったろうか、抱き締めながら拓海は久しぶりの母の感触を味わった。
まぁ。もう大きくなったのに。拓海は子供のときと一緒ね。甘えん坊だわ」
拓海の背に、そっと回された細い手。
「この橋は現(うつつ)と夢を繋ぐ橋。現から逃げ出す橋」
腕の中の母が、拓海を見上げ、柔らかな笑みを浮かべる。
「拓海」
頬に感じる母の手の感触。その指先は冷たかった。
「…とても辛いことがあったのね？」
冷たい母の指先に、ほろりと落ちた拓海の涙が零れる。
暖かい涙に濡れた母の薄桃色の爪が、血のような真っ赤に変化する。
だが、拓海は気付かない。
母はにんまりと笑う。
そして拓海は思い出した。
ボロボロと、涙が零れ落ちていく。
そうだ。思い出した。
とても辛いことがあった。
もう、イヤだと、逃げ出したいと…現を離れるほどに。

バタバタと、将来医者を志す者とは思えないほどに、取り乱した様子で病院内の廊下をひた走る。
注意しようと咎める者も、走る青年の鬼気迫る形相に口を噤む。
目当ての病室にたどり着いた青年は、ノックもせずにドアを開ける。
そこに見えたのは、ある意味見慣れた光景。
酸素マスクに心電図。
だがそこに眠る人の姿だけは違う。
機械に繋がれたそこに眠るのは恋人の姿だ。
見えているものを信じたくない。これは夢だ。そう、涼介は思いたかった。

だが、
「…アニキ」
ベッドの傍らに座っていた弟が立ち上がる。
昨日見たよりも、憔悴した姿。
たった一日で、いや数時間で憔悴して見えるほどの衝撃を受けた弟の姿が、これは現実なのだと涼介に思い知らせる。
動揺する。そんな感情は無縁だった。
感情をコントロールする術など、幼い頃より培ってきた。
年を重ねた今では、笑顔でどんな嘘も吐けるほどに。
だが、今そんな自制は効かない。
勝手に手が震えだし、惑乱した頭は未だ落ち着きのカケラさえ見出せない。
「…何があった」
搾り出すように吐き出した言葉。
言った瞬間に、心臓が一気に暴れ出す。
脳内にドクドクと響き出す音が、自分の鼓動なのだと気付くまでに時間がかかった。
弟が項垂れ、傍らにいた親友が代わりに口を開く。
「…分からないんだ」
けれど、放たれた言葉は、涼介が知りたい事実には遠かった。
分からない？どう言う意味だ」
苛立った気持ちを隠せずに、声に棘を含め吐き出すと、史裕は痛ましいものを見るように涼介を見つめた。
「言葉の通りだ。分からないんだ。何故、藤原が目覚めないのか…。確かに、事故はあった。だが…掠り傷のはずなんだ。車もほぼ傷付いていないし、藤原の外傷も、この…頭部の擦り傷だけだ。検査をしても、脳に損傷は無い。なのに…目が覚めない…。知りたいのは俺たちの方だ」
最後は、常に落ち着いた彼らしからぬ吐き捨てた様子に、動揺しているのは彼も同じなのだと、涼介は怒りを納める。
「…すまない」
ふらりと、夢遊病者のような足取りで、涼介はベッドの傍に立つ。
ベッドの上の、機械に繋がれた恋人の姿。
思えば、彼女の姿を見るのも久しぶりだ。
それなのに…恋人なのだ。
その柔らかい頬に触れる。
あたたかい。
けれど、その頬はもう涼介のために赤く染まらない。
大きな、零れるような真っ直ぐな瞳は閉じられたままだ。
史裕」
柔らかな髪。
少女らしい、細い首。
彼女の全てが愛おしいのに、涼介は彼女から目を逸らしていた。
いつも諦めるように微笑んでいた少女。
だから涼介は知らない。
彼女が何を考えていたのか。

何も…知らない。
「…お前が最後に見た時、藤原はどんな様子だった？」
ゆっくりと頬を撫でる。
滑らかな肌。触れるたびに愛おしさが増す。
どんなって…普通だったよ」
普通…。涼介は彼女の普通すら知らない。
自分の前で、常に萎縮していた少女。
涼介は自嘲めいた笑みを浮かべた。
何でもないことのように、『じゃあ行ってきます』って…普通に笑ってた」
頬を撫でる、涼介の指が止まる。
「…笑ってた…か」
ズキリと、胸に痛みが走ったのは悔恨のためだ。
自分は彼女の笑顔を見たことが無い。
笑顔に、させる事すら出来なかった。
藤原……」
涼介は硬く目を閉じ、己を悔いた。

なぁんだ。やっぱフジワラタクミって男じゃん」
甲高い女性の声が夜の峠に響く。
聞くつもりは無かったが、会話の中に表れた自分の名前に、思わず振り返ってしまう。
え～。でも、女だって話聞いたよ」
新たな女性の声。
それに、拓海の胸が騒ぐ。
一応。プロジェクトDに参加する際に、自分の性別はチームの皆に明らかにした。
それまで年齢不詳。性別不明でもあった拓海の十八歳と言う若すぎる年齢と、そして女性で有るという事実は、少なからずチームに衝撃をもたらした。
拓海は忘れられない。
皆の、嘘だろう？と自分を見つめるあの眼差し。
その目のどれもが、拓海の告げる事実を信じられないでいた。
まっさかー。だって見なよ、あの感じ。背もおっきいし、まんま男の体型じゃん。顔はジャニだけどさー。あれが女のわけないよ」
そうだね。確かに、あんな女いたらカワイソウ～。棒みたいだもんね」
そうそう」
ケラケラと明るく笑う声に、拓海の胸に棘が刺さる。
ギュッと唇を噛み締めて、ギャラリーに背を向けた。
自分が女らしくないことなど、百も承知している。
肩幅も女にしては広く、背も高い。
体付きも柔らかさとは無縁で、骨っぽく、胸は平たく、尻は小さい。
腕も足も筋肉質で、自分の腕ながら男の腕にしか見えない。

カワイソウ…か」
それでも、以前はそんな言葉を聞いても平気だった。
ある意味、女らしさを自分で殺しているところさえあった。
けれど、今は女らしくなりたいと、そう思う。
誰よ、高橋涼介と藤原拓海が付き合ってるだなんて言ったの」
そうだよね～。アレじゃ丸きりホモだもん。そんなわけないか～」
そうよ。涼介様が選ぶのはきっと完璧な人でしょ?きれいで、頭も良くって～」
あはは。あたしらじゃ無理ってことだ～」
そうだけど～夢くらい見たいじゃん」
……夢。
そうだ。拓海も夢を見た。
あそこにいるギャラリーの女の子たちときっと今の拓海は変わらない。
涼介に憧れ、淡い恋を抱き、ずっと夢を見ている。
だから…たとえ嘘でも、その夢が叶ったなどとは、どうしても思えない。
藤原」
名を呼ばれると同時に、ギャラリーの方から キャー!」と言う女性の悲鳴が上がる。
いつもこうだ。
女だけじゃない。男まで、この人の登場と共に憧憬の声を上げる。
†…涼介さん」

振り返ると、指導者の顔をした彼が立ち拓海を呼んでいる。
拓海は彼の傍に行くのが嫌だった。
彼の、隣に並びたくない。
男みたいな自分。
きれいでも、頭も良くない自分。
そんな自分が彼の隣に並ぶことが怖い。
『釣り合わない』
『釣り合わない』
皆から、そう責められるようで。
拓海の胸にまた棘が刺さる。
ジクジクと胸を膿ませ、棘は深く深く刺さる。
抜けないほどに。

ふ、と意識が戻り、拓海は自分が涙を流している事に気付いた。
頬ぬ母の冷たい指が触れる。
†…そう。そんなに悲しい事があったの」
母の腕が拓海を包み込む。
柔らかい母の体。
顔つきは似ているのに、その体格は全然似ていない。
母は、自分とは違い背も低く、体も華奢で丸みを帯びた体をしていた。

「……お母さんみたいになりたかったな」
母の腕の中で、拓海はずっと胸に秘めていた願望を口にした。
お母さんみたいに、女らしくなりたかった…」
まぁ」
驚いたように、母が体を離し、拓海の顔を覗き込む。
何を言ってるの？拓海はとてもきれいじゃない」
拓海は下から見上げてくる母の顔を見下ろす。
しょせん慰めだと自嘲めいた笑みを浮かべ、そんなことは…」と否定しかけた時、母の顔が笑みを浮かべた。
でも…その格好はあんまりよねぇ…。
やっぱり男手だけだと、女の子に気を使わなくってダメだわ」
母が拓海の服を指差した。
今の拓海の服装はTシャツの上に男物のパーカー。そして下はくたびれたストレートのジーンズと、履き古したスニーカーだ。
まるで男の子みたい」
はっきりと言われた言葉に、拓海は恥ずかしくて俯いた。
久しぶりに会った母に、こん自分が情けなかった。
その髪型もそう。きれいな髪をしてるのに、そんなに短くしちゃって…。お化粧もしたこと無いんでしょ？
素顔もかわいいけど、拓海はお化粧して、ちゃんと女の子らしい服を着ればきれいになるのに…」
それは母の欲目だと、拓海は首を振るが彼女は「いえ」と否定した。
拓海はきれいよ。だってこの橋に呼ばれるくらいだもの」
え？」
意味が分からず、母の顔を見ると、母は何も無かったようにニッコリと笑った。
まずは…愛しい子。あなたに魔法をかけてあげましょう」
ゆっくりと母の指が拓海の顔から、体へと辿る。
着ていた服が消える。
そして代わるように現れたのは、淡い白地に、薄物の桜の花びらが描かれた着物。
腕を動かすと、ひらひらと袖が舞う。
まるで桜の花びらを身に纏ったような拓海の姿に、母が嬉しそうにこっこりと微笑んだ。
ほら。拓海はきれい」
拓海は、呆然と自分の身に現れた変化を眺めていた。

涼介は目覚めない拓海の頬に指を滑らせる。
化粧気の無い肌。
今まで付き合ってきた女たちは、残らずその肌を厚い化粧で覆っていた。
それに不快を覚える事も無かったが、女とはそう言うものだとすら思っていた。
だから、化粧気の無い拓海の素肌の美しさに驚いた。

しっとりと、指に吸付くような肌の感触。
太陽の光に焼けても、壊れない肌理と滑らかさ。
ずっと触れていたくなる。
涼介は拓海の頬に唇を寄せた。
眠ったままだからこそ、触れられる。
もしも拓海が目覚めていたら、涼介は触れることを躊躇うだろう。
彼女が、純粋すぎたから。
知れば知るほど、少女が何も知らない無垢な存在なのだと思い知らされた。
その真っ白さゆえに、その素直さゆえに、涼介は穢れた欲望で触れることを躊躇した。
だが、誰か他人に渡すのだけは嫌だった。
今はまだ少年らしさを残しているが、成長すれば誰もが振り返る魅力的な人物になるだろうことは、予想しなくとも明らかだった。
まだ原石の段階で、こんなにも涼介を惹き付ける。
だから…告白したのは涼介からだ。
『…もしかして…俺が好きなのか？』
拓海の好意を薄々感じていた。
だがそれは、淡い憧れに似た感情だとも、知っていたのだ。
だけどそれを利用した。
拓海を…誰にも渡さないように。
わざと顔を顰め、悩み、そして仕方ないとばかりの態度を取ってしまったのは自分の卑屈さからだ。
『いぜ。…付き合おう』
本当は好きなのに。
自分こそが望んでいたのに。
不承不承とばかりに頷いた振りをした。
彼女は、自分と付き合うことなぞ望んでもいなかっただろうに。
狡く、穢れた自分が、己の自己満足のためだけに絡め取った。
俺のせい、か、藤原…」
眠り続ける拓海。
それが、自分への批難のように涼介は感じていた。

突然変化した自分の服装に拓海は目を瞬かせた。
驚き、目の前の母を見つめると、彼女は顔を輝かせ鮮やかな笑みを浮かべる。
まぁ。よく似合うわ。思ったとおりよ」
にこにこと、微笑む彼女を悲しませたくなくて、拓海は曖昧に目を伏せた。
そんなのは嘘だ。
自分には、こんな女っぽい格好が似合うはずなんて無いのに。
そう、思いながら。
けれど、目の前の人にはそんな拓海の内面はお見通しだったようで、彼女は首をかしげ、ふふふと声をあげ微笑んだ。

嘘じゃないわよ。本当よ？本当によく似合ってる」
うっとりと、親と形容するには艶かしすぎる眼差し。
だが目を伏せた拓海は気付かない。
ただ、その声に俯いたまま首を横に振る。
「…自信が無いのね？その謙虚さも魅力だけど、卑屈なのは好きじゃないわ」
彼女の指が拓海の頤に伸び、俯いたままの顔を持ち上げる。
どうしてそんなに自分を卑下するの？」
優しい声音。
優しい微笑み。
その時ふと、感じた違和感に拓海は目を眇めた。
母は……こんな笑い方をするような人だったろうか？
こんな、悪戯めいた笑みではなく、全てを包み込むような…そんな大らかな…。
けれど、そう感じた瞬間、目の前の彼女の目が輝いた。
まるで、ハレーションを起こしたように、くらりと眩暈を感じ、拓海は彼女の腕の中に倒れこむ。
自分より、遥かに華奢なはずの彼女の腕は、しっかりと拓海の体を抱きとめる。
そしてその耳元に赤い唇を寄せ、囁いた。
言ってちょうだい。拓海」
くらくらと、頭の中で忘れたい現実が甦り駆け巡る。
私はね。あなたを助けたいだけなの」
ぐるぐる巡った現(うつつ)。
やがて、ぴたりと一人の人物の姿に思いを止める。
その、傍らに立つ美しい人の姿と共に…。

『いぜ。…付き合おう』

きっと同情だった。
彼を見つめる自分の視線の中の熱。
それに彼はきっと気付いてしまったのだろう。
揶揄するように、『俺が好きなのか？』と問われ、何も答えられない自分に、さも仕方ないとばかりに言ったのだ。彼は。
付き合おう、と。
それが自分への好意から放たれた言葉だと、信じられるほど拓海は自惚れてはいなかった。
最初から、彼がチームの関係や、同情心からそう言わざるを得なかったのだと承知している。
彼が自分など、相手にするはずが無い。
それは火を見るより明らかだ。
何故なら、彼…高橋涼介がどれだけ女性の、男性さえも、魅了して止まない相手なのか、分かりすぎるほどに分かっていたから。
カリスマと言う言葉が、彼ほど似合う人はいない。

尊敬と、ある種憧憬に似た敵視さえ、全てが彼を彩る魅力の現れでしかない。
手の届かない、憧れの人。
だから分かっていた。
付き合おう。そう言われはしたが、真実の意味で、自分たちは恋人同士なのでは無いと。
満足にデートらしいデートも無く、手を握ったことすらない。
半年近く、嘘とは言え付き合っているのに、二人で出かけたのは秋名湖に春。ハチロクの調整を確かめるために彼をナビシートに乗せて走ったことが一度だけ。
だけど、それだけでも幸せだった。
涼介が、義務とは言え自分を気にかけてくれている。
忙しい中、二、三日に一度そっけないけれどメールをくれる。
涼介の中に、自分が僅かとは言え住んでいる。
それだけで良かったはずなのに…拓海は夢見てしまったのだ。
奢ってしまったのだ。
涼介に愛されたいと、身の程知らずにも。
傲慢さの見返りは手痛い現実。
『忙しい』
いつものメールの後に、付け加えられた言葉に錯覚をした。
『お前の走りが見たい。ハチロクのナビシートで、お前の走りを感じながら眠りたい』
よほど疲れていたのだろう。
泣き言のようなその言葉に、拓海は勘違いしてしまった。
涼介は、ドライバーとしての自分は認めてくれている。
自分の走りが涼介の疲れを癒せるのならと、向かった大学の駐車場で見かけた光景に、ずっと見続けていた拓海の儚い夢が壊れた。
彼を、ドライブに誘おうなどと、思わなければ良かった。
彼の、テリトリーに侵入した罰のように思った。
そこにいた彼は一人ではなかった。
傍らに、美しく、スレンダーな大人の女性を連れていた。
とても親しそうな様子に、拓海の胸がざわめいた。
けれど、それでも不安を押し殺し、彼に話しかけようと近寄った拓海の目の前で、見たくない現実がやってくる。
『:おい。するなよ、こんなところで』
『いでしょ?貸しよ、貸し。どうせ今度の週末も、あのDとか言う車のチームの関係で出れないんでしょ?そのフォローをしてあげる見返りよ』
拓海の目の前で、女性が涼介の首に腕を絡め、自然な仕草で唇を重ねた。
涼介も、嫌がるでもなく、当たり前のようにそれを受け止め、そして苦笑し女性に文句を言うが、真剣に怒っているようなものではない。
くらりと、目の前が真っ暗になった。
まるで…ではない。
目の前の二人こそが、本物の恋人同士なのだと。
嘘なのは…自分の方だと、拓海は思い知らされた。

儚く、淡い自分の夢。
それが脆くも壊れ、彼の傍らに並ぶ、お似合いとしか表現できない大人の女性の姿に、自分の見ていた夢の愚かさを思い知らされた。
傍らに立つ彼女の容姿だけではない。
自分では、彼にあんな表情をさせられない。
いつも、怒ったような無表情か、困ったような溜息ばかり。
自分が今までどれだけ彼に無理をさせてきたのか、それも思い知らされ拓海は絶望した。
馬鹿馬鹿しいまでの自分の片思いに、涼介が無理をして付き合ってくれただけのこと。
ただ、それだけの事だったのだと。
漸く、拓海は気付いたのだった。

事故があった日。
拓海はいつもより明るかったと言う。
『俺、ジュース買ってきますよ』
と、率先して使いに出ようとしたり、いつもぼんやりハチロクの調整を待ってたりするのが、珍しく色んな人間と笑顔で明るい調子で会話をしていたそうだ。
『何か良いことでもあったのか？』
あまりの機嫌の良い様子に、史裕がそう問いかけると、拓海は微笑み、『ま、そんなところです』と答えていたらしい。
概ね、あの日の拓海は機嫌が良かったと答える中、しかしハチロクのメカニックである松本だけは違う意見だった。
『ヤケになってるように見えました』
タイムも上がっているし、本人の調子も良さそうだった。
だが…確実にいつもの拓海との違いがハチロクに現れていた。
いつもの拓海ならハチロクへの負荷は少ない。
それは拓海が、まるで手足のようにハチロクを操れるほど一体化しているせいだ。
なのに、あの日の拓海は違っていたらしい。
『俺には藤原がハチロクと心中したがってるように見えましたよ』
ハチロクを痛めつけ、と同時に自分を痛めつける。
笑顔で、手首を切るリストカッターのように、彼女は自分を傷つけようとしていた。
手首を何度も切ってしまう人間の心理を、過去涼介は講義で学んでいる。
心の痛みを、手首を切ることで発散しているのだ。
痛みが激しいからこそ、他に新たな痛みを作り紛らわそうとしている。
「……藤原」
涼介はベッドの上に横たわったままの拓海に呼びかける。
けれど、目は開かない。
眠ったまま、涼介をあの大きな瞳で見つめ返す事は無い。

「…藤原…！」
戻れるなら、最初からやり直したかった。
嘘やごまかしなどではなく、素直に、彼女に愛を告白したかった。
『好きだ』
と、そう伝え、少しずつ始めていけば良かった。
けれど愚かな自分は、戸惑いや躊躇いで素直に始めることが出来なかった。
もしも……」
涼介は拓海の手を取った。
その手のひらに、自分の唇を押し当てる。
重いステアリングを握る手のひらは固く、硬化している。
柔らかくない手のひら。
だが、その手のひらこそ愛おしい。
もしも…俺の命と引き換えにお前が目覚めるなら…」
拓海を縛りつけようとしたのは、自分のエゴだ。
自分を好きでいて欲しいという気持ちも、自分勝手な感情でしかない。
それら全てを捨て去り、現れるのは拓海への愛情だ。
幸せでいて欲しい。
たとえ、自分が隣にいなくとも。
俺は…お前のために命を捨てるよ」
だから、目覚めてくれと、涼介は願いを込めて呟いた。
しかし、願いは届かず拓海の目は開かない。

暫く、手を握り締めたまま願っていた涼介は、漸く諦め、拓海の手を離し顔を上げた。
そして。
ベッドに眠る拓海の傍ら。
自分の真向かいの位置に、薄ぼんやりと立つ人陰を見つけた。
「……誰…」
問いかけの言葉が途中で止まる。
人間ではありえない。透き通ったその影。
伏せていたその顔が上がり、涼介に向かい儚く微笑む。
その顔。
その姿は、ベッドに眠る拓海のものと良く似たものだった。

涙ながらに、涼介との事を語る拓海に、優しい腕が拓海を包む。
拓海より明らかに体格が小さいはずなのに、その胸は広く、まるで自分が幼子のようになった気さえ感じる。
着物から香る、香水とは違う、焚き染めた香木の匂い。
不思議な空間。
死んだはずの母。
そして日常に嗅ぎなれない香り。
――まるで夢のようだ。
そうだ。母も言っていた。

この橋は夢と現を繋ぐ橋なのだと。
「…いつでも不実な男に泣く女の涙は変わらないわねぇ。本来なら、無視してるところだけど、あなたはこの私が気に入ったきれいな子。ねぇ、私と一緒にいらっしゃいな」
その声が、いつの間にか母のものとずれている。
母のよりも高く、そして明るい声だった。
拓海は俯いていた顔を上げる。
自分を腕に抱くのは、すでに母の顔をしていなかった。
落ち着いた絽の着物ではなく、目の前の人は鮮やかな花魁の姿をしていた。
目元を彩る朱。唇に塗られた紅。
切れ長の瞳が、細められ拓海を見つめている。
母ではない。
そう気付いたのに、拓海の頭はそれを異常だと感じる事が出来なかった。
ぼんやりと霞がかかったように、ただ目の前の人の言葉を聞き取るだけ。
「一緒にいらっしゃいな。現には辛いことしか無いのでしょう？」
彼女の言葉に、拓海は頷いた。
じんわりと、悲しみが甦る。
また零れた涙を、彼女は自らの袖で拭った。
「この橋の向こうは夢。辛いこともなく、あなたを傷つけるものなどない世界。
だから、いらっしゃい。
そして私と一緒にいましょうね」
優しい腕。
優しい声。
香水の刺激的な匂いとは違う、どこかボンヤリと包み込む香の薫りに、拓海の心が揺らぐ。
そうだ。
もうあそこは嫌だ。
自分を傷つける、辛いものばかり。
「…ね。いらっしゃい。こっちよ」
彼女が拓海の腕を取り、橋の向こうへ導く。
拓海は促されるままに、彼女に連れられ足を進めた。
だが、

ダメよ、拓海」

響いた、懐かしい声。
さっきまで目の前の人から響いていた声。
けれど、今は背後から聞こえた。
ぼんやりとしていた拓海の意識が戻る。
そして背後を振り返ると、そこには紛れも無い、懐かしい母の姿があった。
彼女は着物ではなく、拓海の記憶にある姿と同じ服装をしていた。

父から唯一贈られたのだと、はにかみ微笑んでいた薄いピンクのワンピース。
そんな母に、小さい頃、拓海はせがんだ。
『おかあさん、たくみがおっきくなったらそのようふく、ちょうだい』
けれど母は決して頷かなかった。
困った顔をしながら、
『だめよ。これはお父さんがお母さんにくれたものだもの。だからこれだけはお母さんのもの。拓海にはあげられないわ。
でもね、きっと拓海にも、お父さんみたいに贈ってくれる人がいるわ。だから、その人のために良い子で待つのよ？』
そう諭してくれた母。
「…お母さん」
じわ、と拓海の目に先ほどとは違う涙が浮かぶ。
毅然とした表情で、母は拓海と、そして拓海の腕を取る女性を見据えた。
行ってはダメよ、拓海。その先行ってしまえば、もう二度と戻れなくなってしまうわ」
母の言葉に、拓海の傍らの女性が「ホホホ」と軽やかな笑い声を上げる。
「これはとんだ邪魔が入った。
あなたもきれいだから好きよ。けど、この子はもっと好き。だから渡せないわ」
母が、女性を厳しい目で睨む。
ああ、あの目。覚えてる。
自分に悪さをしようとした男を相手に、毅然と睨みつけたあの時と同じ。
大きくなって、それが悪戯目的の変質者なのだと理解した。
そして、あの時の母が、華奢な見かけにも関わらず、自分を守ろうと強くあった姿も。
「橋姫様」
母が、拓海の背後の女性に向かい呼びかける。
「あの世とこの世を結ぶ橋を治められる橋姫様とお見受けします。お願いですから、この子をあちらへ連れていかないで下さいませ。
この子にはあちらに、まだやらなければいけないことがたくさんありますもの」
フフフ、と橋姫と呼ばれた女性が笑う。
けれど拓海はもうあちらが嫌みたい。
この橋に呼んだのは私だけれども、私のところにまで声を届かせたのはこの子。
私はこの子の呼びかけに答えただけよ？」
キュウと母の唇が引き締められる。
「この子には…あちらで待ってる方がいます」
どんな？けれど、どれもこの私よりこの子を愛しく思う者ではなかろう。
この子の父だとて、お前が一番でこの子は後回しになってるではない

か」
いったい何が起こっているのか。
拓海には何が何だか分からない。
けれど…。
悲しみは現実だ。
拓海は叫ぶ。
お母さん！オレ、もうイヤなんだ、辛いの！あっちは辛いことばかりだ！この人と一緒にいったら、もう辛くないんだって。だからオレ行くよ！」
母が悲しそうな顔をする。
そして、拓海に向かい口を開く。
また、言うのだろうか。「ダメだ」と、咎めの言葉を。

「駄目だ」

けれど、響いたのは母の声ではなかった。
母の背後の暗闇の中から、ゆらりと現れた姿。
拓海は目を見開いた。
チッ、と橋姫の舌打ちを打つ音が聞こえる。
「お前……」
恨めしそうな声。
だが、それに拓海は気付いていなかった。
ただ魅入られたように、現れた涼介の姿を見つめていた。

ゆらりと、病室に現れた影。
それが、拓海の血縁者だと分かったのは、その唇が「拓海…」と、さも愛しげに彼女を名を囁いたからだ。
思わず、涼介は影の前に立ちはだかる。
影から、拓海を守るように。
「藤原は連れて行かせない！」
涼介には、影が拓海を迎えに来たように見えた。
たとえそれが拓海に近しい者であろうと、自分から拓海を奪う者を許せる筈が無い。
けれど、立ちはだかる自分に、影は満足そうに微笑んだ。
『ええ。拓海は連れていかせないわ』
邪気の無い笑み。
それは拓海と同じ、涼介の好む笑みだった。
嘘も、偽りも無い心からの笑み。
ふと、涼介の気負いが消える。
『拓海は連れて行かせない。
だから貴方の力が必要なの』
スウ、と影の手が自分に差し出される。
涼介は不審に思い、その手を取ることはしなかった。
懐疑の眼差しで見つめ、眉を顰める。

「…俺の？」
腕を差し出したまま、影は涼介に向かい頷く。
『ええ。貴方でなければ無理。
拓海を、あちらへ送ってしまった貴方でなければ…』
その言葉に、涼介の胸に激しい痛みが走る。
全身が強張り、ブルブルと怯えたように体が震えた。
「…俺…のせい？拓海が…こうなったのは…」
頭のどこかで、やはりと言う声がする。
今すぐ、彼女の目の前で謝罪したほどの罪悪感。
そして後悔。
『そう。貴方の臆病さがあの子を傷つけ、そしてあの子の不器用さが今の事態を生んだ…』
涼介は振り返り、拓海の頬に手を伸ばす。
かわいいと、思ったのだ。
自分を見て頬を染める年下の少女。
女なのだと言う事は、医学を志すものである。
最初から分かっていた。
全てが自分の計算を越え、そして魅惑する。
「…俺のせいか…拓海…俺が…お前を追い詰めたのか？」
許しを請うように、その頬に手を伸ばし額を寄せる。
ポタポタと、閉ざされた瞼に雫が落ちる。
それで、涼介は自分が泣いていることに気が付いた。
彼女を欲しいと、ただのエゴで手に入れた。
それが拓海をこんな目に遭わせてしまったのか…。
涼介は深い後悔を味わっていた。
もしも叶うなら、どんな方法でも償いたい。
自分の命を差し出せというのなら、喜んで差し出すだろう。
彼女が目覚めるのならば。
『間違えないで。あなたばかりのせいじゃない。拓海が……ちょっと先走りすぎちゃっただけなの』
慰めるように微笑む影。
その腕は涼介の肩に置かれている。
じんわりと、柔らかい熱のようなものが伝わる。
影は、涼介の隣に並び、眠る拓海の姿を覗き込む。
『この子は…本当に困った子。小さい頃から、色んな人から好かれすぎてしまうの。大人の男だったり、動物だったり…車にまでね。』
影の言葉に、驚き見つめ返す涼介に、影はにっこりと微笑んだ。
『ねえ、貴方。拓海を取り戻しにいきましょうよ』
また影が涼介に向かい手を伸ばす。
涼介は今度は躊躇わなかった。
『拓海が欲しいのなら、他の人になんて奪われちゃ駄目よ。それが……神様でも』
涼介は細いその手を握り返した。
そして気付いたとき、涼介は薄暗い闇の中の…橋の上にいた。

一瞬、自分の願望かと思った。
白皙の面に闇色の髪。闇色の瞳。
まるで暗闇の中から現れたような彼の姿に、拓海は目を疑った。
†‥涼…介、さん…？」
目が、彼から離せない。
そして彼もまた、射抜くように拓海をひた見据えていた。
今まで見たことの無いほどの、ぎらついた強(こわ)い眼差し。
行くな、藤原」
強い口調と強い眼差し。
涼介から、拓海に向かうオーラが見える。いつも冷静な彼らしからぬ、熱い感情がその全身から滲み、その全てが拓海と言う存在に一身に向けられている。
その熱に当てられ、拓海はぐらりと眩暈を覚える。
橋の手すりに手を付き、崩れ落ちそうな体勢で、母と、そして涼介を見つめ返す。
†‥なんで……？」
じわじわと、涼介の存在を確認した事で、視界が滲み出す。
胸の中に色んな感情があふれ出す。
†‥こっちへ戻って来い。橋から降りるんだ！」
涼介が手を伸ばす。
拓海はそれに一瞬惹かれるが、けれどすぐに首を横に振る。
†‥いやです」
拒絶に、涼介の顔が歪む。
もう…いやだ。あっちへ行けばまた涼介さんのことで苦しむんだ。自分が惨めな気持ちになって…どんどんドロドロになってく…。そんなの…もういやなんだ」
そうだ。
また惨めになる。
今は引き止めてくれてるかも知れないが、涼介から愛されていないのは変わらない。
涼介から無視され、他の女と仲良くしている姿を見させられるのは、もう嫌だった。
心が壊れ、ドロドロになって、自分がとても醜くなった気がする。
ウフフフフ」
項垂れる拓海の体を、背後から柔らかい腕が包み込む。
嗅ぎなれない香木の香り。
拓海はお前に絶望したのに、まだ抜けぬけとこの子を手に入れようとするのね。本当に忌々しい男」
スウ、と拓海の頬に橋姫の頬が寄せられる。
真っ赤な紅の塗られた唇が拓海の目の前で閃く。
言っておあげなさい。お前など…大嫌いだと」
切れ長の、朱に彩られた瞳が拓海を見つめる。
嫌いだと…もう姿を見せるなと、言っておあげなさい」
ジン、と頭が痺れたように何も考えられなくなる。
催眠状態にかかったかのように、橋姫の言葉だけが頭の中を巡る。

そして勝手に口が動き、言われたとおりの言葉を紡ごうとする。
しかし。
言えばいい！」
強い声がそれを遮った。
ふ、と霞んでいた靄が消え、頭がクリアになる。
言えばいい。だが…俺は諦めない！」
パン！と耳元で扇を叩く音がした。
見ると、橋姫が涼介を睨み、扇を欄干に叩きつけている。
ええい。憎々しや。悪戯に拓海を弄び、今また拓海を苛もうと言うのか！
この子は玩具では無いぞ。捨て置いた玩具でも、奪われそうになったら惜しんだか！」
……玩具。
その表現に拓海の心が暗く沈む。
涼介にとっての自分など、きっとそれぐらいの取るに足らないもの。
今は惜しんでくれても、すぐに忘れるだろう。自分のような存在など。
だが、そんな拓海の思い込みを、意外な人物が否定した。
橋姫。それは失礼な言い様です」
緊迫した空気を壊すように凛とした声が響く。
その声の主は母だった。
拓海の視線が母へ向かう。
すると母はきつく拓海を見据えた。
「この場所に来るのに、この方は命を賭けています。
おいそれと生者が来られるような場所ではない事は、橋姫様が一番ご存知のはず。
あだやおろそかで、そんな事が出来るとお思いですか？」
命？
拓海は思わず、涼介の顔を見つめる。
その顔に生気は無く、薄暗く血の気が無い。
確かに。ここまで魂を飛ばすのは生半では出来ないこと。また元に戻れる保障も無い事ですものね」
橋姫の口調が、先ほどの激昂したものとは違い、また穏やかなものに変わる。
言い換えれば、今ここでお前に害を与えれば、そのまま二度と目覚めることが無いということ」
ニッコリと、赤い唇が半月を形取る。
「ここで今すぐお前を殺してやろうか？」
穏やかな、けれどそれだけにその言葉はゾッと響いた。
思わず、拓海は振り返り、橋姫の前に立ち両手を広げ、涼介を庇うように立ちはだかった。
だめ！」
自分が死ぬのは構わない。
けれど…涼介には幸せでいて欲しいのだ。
だめ！」
きつく、橋姫を睨むと、彼女はフゥと息を吐き、そっぽを向いた。

†…冗談よ。だからそんな目で見ないでちょうだい。あなたに嫌われるのはいやだわ」
彼女から立ち昇っていた殺気が消える。
おそるおそる、拓海は用心しながら、広げていた両手を下ろし、警戒を解いた。
しかしその瞬間、背後から力強い腕が伸び拓海の体を浚った。
「?…!!」
ふわ、と香る匂い。
橋姫の香木とは違う、人工の香水の匂い。
けれど、拓海が良く知る香りだった。
「†…藤原」
逞しい腕が、拓海の体を背後から抱き締めている。
首筋にかかる熱い吐息。
そして耳元に囁かれた声で、顔を見なくとも、その持ち主が誰だか分かる。
「†…藤原」
もう一度名を呼ばれ、拓海の体が強張り、そして目に涙が浮かぶ。
愚かしい。
涼介に抱き締められるのはこれが初めてだった。
諦めたと、捨てたいと、そう思った恋なのに、未だ抱き締められれば心が喜びに震える。
そんな自分が情けなくて、悔しくて。だけどこの腕を振りほどけなくて。
拓海の瞳からボロボロと涙が零れた。

拓海の母だと名乗る人物が語る内容は、簡単には信じられるものではなかった。
『あの世とこの世を結ぶ橋。それを治める橋姫様のところに迷い込んでいるの』
だが、目の前の彼女の姿自体が、現実ではありえないもの。
いわゆる幽霊と呼ばれる存在から語られる言葉を、涼介は否が応でも信じずにはいられなかった。
それで…藤原を取り戻すためにはどうしたら良い？」
決意を込め見返した涼介に、彼女は満足そうに頷いた。
『命を賭ける覚悟はある？もう二度と目が覚めることがないかも知れない。死ぬかもしれないのよ？』
試すような言葉。涼介はそれを鼻で笑う。
そっと、ベッドの上の眠る拓海の頬に指を滑らせ、愛しいものを見つめたまま答えた。
死ぬのは嫌だな。
だが…藤原が目覚めないのはもっと嫌なんだ」
考えただけで、心臓が痛む。
きっとこのまま拓海が眠り続けたまま、目覚めないとしたら。
涼介の心は壊れるだろう。

ただ息をし、動くだけの人形のような存在に。
だから…俺の命ぐらい安いものだ。幾らでも賭けよう」
母が、コロコロと軽やかな笑い声を上げる。
『目が覚めたなら拓海に服を送ってあげてちょうだい』
服？
ああ、きっと似合うだろう。目の前に立つ彼女のような、清楚な淡い色のワンピース。
『この子は、大事な人からプレゼントされる服を待ってるのよ。だから、この子に似合う服をプレゼントしてあげてちょうだいね』
涼介はしっかりと頷いた。
そして次の瞬間、視界が真っ暗に変わり、再び目を開いた時。
涼介は靄のかかった橋の前にいた。

触れられている。
抱き締められている。
自分を強く抱く腕の持ち主は、ずっと焦がれていた相手。
驚きと、喜びと、そして悲しみが入り混じる。
「…好きなんだ」
背後から囁かれた言葉に、拓海の体がビクリと跳ねた。
「…好きなんだ。だから…行かないでくれ」
これは夢。
夢にしても…酷すぎる。
ボロボロと、拓海の瞳から涙が溢れ出す。
「……うそつき」
震えながら発した呟きに、拓海を抱く涼介の腕が緩んだ。
「え…？」
体勢を変え、涼介に向き直る。
そしてその端整な顔を睨み上げ、言い放った。
「うそつき！」
涼介の顔が困惑に歪む。
「…嘘…とは？」
逃げようとする拓海の体を、我に返った涼介が肩を強く掴み阻む。
拓海は首を横に振り、そんな涼介から何とか逃げようとする。
「信じない！涼介さんの言うことなんて…信じない！」
肩を掴む、涼介の手の力が強まった。
拓海は痛みに顔を歪める。
「…信じられなくしたのは…俺か…？」
涼介を拒むように、ぎゅっと固く目を閉じる拓海の耳に届いたのは、彼らしからぬ、か細く、切なげな声だった。
思わず、拓海は目を開く。
「…そうだな。全部…俺が悪い。素直にお前に好きだと、最初から伝えていれば良かった。
拒絶されるのが恐くて、半ばお前を脅すように付き合うことを承諾させた」

悲痛に歪められた涼介の顔。
常に、自信に満ち溢れた彼とは違う、情けなくも弱さが溢れた姿。
拓海は目を見張った。
そして自分の肩を掴む、涼介の手が微かに震えていることにも気付く。
愚かしいだろう？」
自嘲の笑みを刻む彼は、拓海が知る今までの彼とは明らかに違っていた。
けれど、その姿は嘘や演技などではないと、なぜか本能的に感じていた。
今までのどこか高圧的だった彼の姿の方こそが、演技だったのだと。
藤原に拒絶されたくなかった。否定の言葉を聞きたくなかったんだ。
そんな風だったから…藤原に好かれている自信が無くて、お前に触れることすら出来なかった」
ゆっくりと、涼介の指先が肩から、拓海の頬へと移動する。
冷たい指先。それは微かに震えている。
拓海は衝動的に、その指を暖めてあげたいと感じた。
ずっと…お前に触れたかった。触れて…もっと…俺だけのものにしたかった」
おずおずと触れてくる指先に拓海は頬を預ける。
†……すればよかったのに」
ポロリと零れた言葉は本音だ。
ずっと心の奥底に抱え込んでた拓海の気持ち。
涼介がそんな拓海の言葉に、驚いたように目を見開く。
だがすぐに苦笑し、
†…出来ないよ。藤原はきれいすぎて、俺なんかが触れれば穢れてしまいそうで…」
どこか遠い目をしながらそう語る。
その言葉に、拓海の中で押さえ込んでいた怒りが湧き起こる。
俺はそんなきれいなんかじゃないです！」
何も知らないくせに。
藤原はきれいだ」
ここだけは譲れないとばかりに、気弱だった涼介がきっぱりと強い口調で断言する。
きれいなんかじゃない！俺は…本当は心ん中がすげードロドロしてたし、涼介さんの周りの女の人たち、みんなずっとぶん殴りたかった。
男に間違われるたびに、こんな俺じゃ涼介さんに似合わないって言われてるみたいだったし、俺が男じゃないって否定しない涼介さんにも……ムカついてた。
本当は俺みたいのなんかと付き合ってるのが恥ずかしかったんでしょ？誰にも、俺と付き合ってるなんて言ってないし…」
現の悲しい記憶が甦る。
誰も知らない。
拓海と涼介が付き合っているだなんて。
手を出されないことより、他の女の人とキスしていたのを見た時より、それが一番ジワジワと、深く拓海を傷つけた。

上手いことを言おうが、結局そう言う事なのだろう、と。
それは違う！」
けれど、そんな拓海の言葉に強い口調で涼介が言い返す。
誤解だ！俺が…メンバーの誰にもお前との仲を言わなかったのは…」
独占欲よね？」
言いよどむ涼介の言葉の続きを口にしたのは、それまで静観していた橋姫だった。
はふぅ、と欠伸をしながら、つまらなさそうに扇を振る。
聞けば聞くほど愚かしい男。
大方、拓海と付き合ってるだなんて公言すれば、せっかく女性として意識されていない拓海が、恋愛の対象になるのだと気付かれるのを恐れてのことでしょう？
それと同じで、女である事を訂正しないのも、女性として誰からも意識して欲しくないから。
つまりは自分だけが、拓海の魅力を知っていたかったのよね？」
突然の橋姫の言葉に、拓海は信じられない気持ちで涼介を見返す。
すると彼は、気まずそうに顔を顰め、そして橋姫を睨んでいる。
けど、残念。
お前がいくら隠そうとも、知るものは知っているものよ。私だけでなく…おやおや。他の男たちにもね」
ボワ、と橋の水面に知った人間の顔が浮かび上がる。
かつての先輩。かつてバトルをした相手たち。
どうして彼らが水面に映るのか？

不思議に思っている拓海の前で、涼介がギリと歯噛みする音が聞こえた。
「……知っているさ。だからこそ大事に隠していたんだ」
フフフ、と橋姫の笑い声が響く。
大事に隠して、それで肝心の拓海を悲しませては意味がなかろうに。
女は置物ではなくってよ。大事と言う言葉は、きちんと可愛がってこそ使える言葉。
履き違えた愚かな男は、他の女とでも情を交わしているがいいわ」
ゆらりと映像が消え、次に現れたのはあの女性。
拓海の目の前で、涼介にキスをしていた、あの人だ。
現れた彼女の姿を見た瞬間、涼介の顔が顰められる。
舌打ちし、そして橋姫を睨む。
私が拓海に教えたのではないわ。
拓海は見たの。
そしてお前に絶望し、この橋にやって来た」
涼介が驚愕に目を見開く。
そしてチラリと拓海を窺った後、気まずそうに視線を逸らしたことで、拓海は答えを知った。
ポロリと、また涙が零れ落ちる。
あれは……そんなのじゃない」
悔しい。
嫉妬で女は鬼になると言う。
だったら、拓海も鬼になりそうだ。

胸が焦げ付き、怨嗟の炎を吹きながら。
そんなのじゃない？都合の良い詭弁だこと。
欲望を解消するだけの相手？
拓海に手を出せなかったから、そんな相手が必要だったとでも？
結局は、決めた相手がいながら、他の女と肌を交わした事実に相違はあるまいに」
涼介は無言のままだった。
それでまだ良かった、と拓海は俯きながら感じていた。
これで、涼介の口から言い訳めいた言葉が吐き出されようものなら、拓海のキズは深まるばかりだ。
結局、涼介は拓海では駄目なのだと、思い知らされて。
分かった？
全てはお前自身が招いたこと。
だから…いらっしゃい。拓海」
橋姫が手招きする。
不実な男など見限って、私といらっしゃい。
あなたのようなきれいな子こそ、私の元で守られるべき。
さぁ、おいで。愛しい子。私と一緒に行きましょう？」
ゆらゆらと、揺れる白い手。
にっこりと微笑む紅い唇。
拓海は誘われるように、ふらふらと橋姫の方へと歩み寄ろうとした。
駄目だ」
しかし、その腕を涼介が掴み阻む。
カッと怒りに目が眩んだ。
想像したのだ。
その手で、あの女性に触れる涼介の姿を。
触んなよ！」
衝動的にその腕を払った。
傷付いたような涼介の表情。
それに胸が痛むが、嫌悪感の方が勝った。
…俺が許せないか」
許す？
拓海は自分らしくない顔で笑っているのを自覚した。
きっと今、嫌な顔をしている。
嫌な笑い方をしている。
…涼介さんは身勝手だ」
こんな自分になりたくなかったのに。
こんな自分は醜い。汚い。
そうさせた涼介が今は憎かった。
あんたなんか大嫌いだ」
今度は、自分の意思で、そうはっきりと告げた。

大嫌い。
そう言われても仕方が無い。

身勝手と言われ、納得してしまう自分もいる。
確かに、全ては自分の身勝手な都合で拓海を振り回した。
嫌われても仕方ないだろう。
だが……。
それで、諦めるかどうかは、涼介の自由だ。
拓海のためなら、幾らでも傷付こう。
自分が傷つけた分、いや倍以上傷つけられても構わない。
俺を嫌いでも構わない」
振り払われた腕を、また掴む。
今度は、簡単に振り払えないよう強く。跡が残るほどに。
俺は絶対にお前を諦めない」
拓海の、大きな瞳がさらに大きく見開かれる。
行かせない」
拓海が目覚めるなら。
拓海がもう一度笑ってくれるなら。
お前を橋の向こうへなど行かせない」
これはもう既に恋ではない。
愛だ。
お前は現実へ帰るんだ」
自分を、欲望に忠実な男だと思っていた。
身勝手だと自覚していたし、自身の欲望のためには人を犠牲することも厭わなかった。
けれど。
今は拓海のために己を犠牲にできる。
最初から素直になっていれば、もっと違った始め方が出来ただろうか？
今更のように慌て、命さえ投げ出そうとする自分が愚かで、滑稽で、涼介は己を笑うかのように、拓海に向けて鮮やかな笑みを浮かべた。

大嫌い。
言った瞬間に後悔をした。
けれど、この言葉で少しでも彼が傷付けば良いと、そう意地悪く思う気持ちも確かにあった。
だが思惑に反して、彼は拓海の腕を強く掴み、そして鮮やかに微笑んだ。
まるで。
そう、まるで宗教画に出てくる、殉教者のような笑みで。
ぞわりと、背筋に悪寒めいた感覚が走る。
ゆよ…すけさ…？」
名を呼ぶ声が掠れた。
ぐ、と腕に食い込む指が痛い。
お前は現実へ帰れ」
そして涼介は、視線を拓海の背後に向ける。
代わりの命が欲しいなら、俺でよければくれてやる」

涼介の言葉は、拓海の後ろの橋姫へと向けられたものだった。
拓海は、その言葉の意味を遅ればせながら理解し、目を見開く。
それはつまり、拓海の代わりに涼介が…。
ダメ！」
「……お前のような穢れた魂はいらないわ」
拓海の叫びと、おっとりとした橋姫の応えは同時だった。
パチンと、扇を閉じる音がする。
私が欲しいのは穢れの無い無垢な魂。
誠無い人の心根に傷付き、真っ赤な血を流す真白の鳩のような子が好き。
お前では、私の橋に昇る資格すらない」
うんざりとした表情で、橋姫は涼介を扇で振り払う。
触れてもおらず、遠くから振っただけの扇の風に煽られ、拓海の腕を掴む涼介の指が離れ体勢が崩れた。
涼介さ…！」
よろめいた彼を心配し、橋を降り駆けつけようとした拓海の腕を、今度は橋姫が掴む。
さぁ、いらっしゃい」
振り返れば、鮮やか笑みを浮かべた美しい人。
そんな男なんて放っておきなさいな。
今は甘い言葉を囁いているかも知れないけど、また現に戻れば同じ事を繰り返すわ。
お前を傷付け、そして他の女に手を伸ばす」
ズキリと、拓海の胸が痛む。
ゆらりと、また視界が涙で滲む。
そうだ。きっと同じだ。
また拓海は彼の周りの女たちに嫉妬するだろう。
彼に似合う綺麗な人たち全てを恨み、そうあれない自分を嫌悪して。
拓海の視線が、涼介から橋姫へと移動する。
にっこりと、彼女が微笑み、拓海に向かい手を差し出した。
さ、いらっしゃい」
橋の向こう へ行けば彼を忘れられるだろうか？
この胸の痛み。自分への激しい嫌悪感。
橋姫へ向かい一歩踏み出す。
そして差し出された手を取ろうとした瞬間、
拓海！」
涼介の叫びが聞こえた。
だが……。
拓海は振り向かない。
もう、嫌なのだ。
彼に愛されない自分なんて…。
たくみ」
何もかも捨てようと、諦めかけた時、懐かしい声が耳に届く。

幼い頃、漢字の読みではなく、ひらがなの読みで拓海の名を囁いた人の声が。
そして。
パアン、と頬に破裂音が響き、遅れて痛みが現れる。
何が起こったのかと、伏せていた瞳を開くと、目の前に母がいた。
生きていた頃から、滅多に見せない怒った顔で、拓海の前に立っている。
振り下ろしたような手。
それで拓海は、母に自分が叩かれたのだと気が付いた。
「いかげんになさい」
「おか…さん…」
じわ、とまた目に涙が浮かぶ。
あなたが信じられないのは、彼ではないのでしょう？
拓海が信じられないのは、自分自身。自分に自信がないから、彼の手を取るのが怖いだけなんでしょう？」
ぐ、と言葉に詰まる。
「…だって…」
そうだ。信じられないのは自分。
どれだけ彼に愛を囁かれようと、拓海は自分に自信が無い。
こんな自分を彼が好きになるとは思えない。
いつか、もっと綺麗な人のところへ行くに違いない。
そう、思い込んでいる。
だってじゃないわ。それって彼に失礼よ。拓海は、彼の言葉を聞きもしないで、自分の殻に閉じこもってるだけ。
ちゃんとした恋人同士になれなかったのは、彼だけの責任じゃないのよ？あなたにも責任があるの。
彼が他の女の人に目を向けて欲しくないんだったら、ちゃんと彼の傍で見張っておけば良いのよ。彼が、他の人に目を向ける余裕もないくらい、振り回してやれば良かったの。それもしないで、逃げるばかりだなんて、とっても卑怯だわ」
「でも…」
「でもじゃないの！」
弱気な言葉を、ビシャリと遮られ言葉を失う。
私はあなたをそんな意気地なしに育てた覚えはないわよ？
お父さんもそう。あなたをしっかりと…ちょっと放任なところもあったけど、育てたはず。
拓海はお父さんと、私の子供だもの。勇気のある、我慢強くて負けず嫌い。
ね？そうでしょう？」
拓海の両の手のひらを母の手が包む。
あたたかい手のひら。
この手が、指が、冷たくなった瞬間を知っている。
最後に触れた母の指は冷たかったのに、今は暖かい。
「…お母さん」
母が亡くなったとき、拓海は人前で決して泣かなかった。
人から、

『かわいそうに』
と言われたくなくて。
堪え、堪えて後で布団に包まり激しく泣いた。
自分はかわいそうじゃない。
母が死んだのは悲しいことだったけど、自分はかわいそうなんかじゃない。
だって母がいなくなっても、母が拓海を大事に思ってくれていることは変わり無いから。
かわいそうに、と言う言葉を出してさしのべてくる周囲の手。
あの頃の拓海はその全てを拒絶した。
甘えたくなかった。
母の死という現実から。
同情なんて、されたくなかったのだ。
だが今はどうだろう。
バカみたいに泣きはらし、そして辛い現実から目を逸らし、甘えさせてくれる腕の方へと逃げようとしている。
俺……」
拓海は唇を噛み締めた。
いつの間にこんなに情け無くなったのだろう。
自分を強い子だと言い切る母の前で、拓海は自分が恥ずかしくなった。
死のうとする勇気があるのなら、彼の腕に飛び込む勇気くらいあるはずよ」
母の手が、躊躇う拓海の背中をポンと押した。
背後で、橋姫の溜息が聞こえる。
「惜しいわねぇ」
よろめいた拓海の体を、涼介が駆け寄り受け止めた。
泣きそうな表情。そしてやっと手にした拓海の体を、もう離さないとばかりに強く抱き締める。
「涼介さんは…」
ずっと怖くて聞けなかった言葉。
涼介さんは…俺のこと、ちゃんと好きですか？」
ふ、と彼の顔が泣き笑いのように歪む。
好きだよ」
じわ、と心にあたたかいものが広がる。
なぜ、とか、どこが、とか言うなよ。理屈じゃないんだ。藤原拓海と言う存在に魂ごと惹かれた。
お前があの橋の向こうへ行くのなら、俺は何としてでも連れ戻すし、それが無理なら一緒に行く。
だからお前、もうあの橋の向こうへ行こうだなんて思うなよ？」
抱き締める彼の胸から、激しく高鳴る鼓動が聞こえる。
拓海と同じように、彼の鼓動も激しく鳴るのだ。
「なんでですか？」
顔を上げ、彼を見上げると、降って来るのは甘い、甘い眼差し。
とても愛しそうに自分を見つめる涼介の瞳だった。
あの橋姫は、俺が橋の上に上がることすら好とはしないからさ。

俺があの橋に昇ろうものなら、橋姫にいびられ、川の底に突き落とされるくらいするだろうな」
川の底。
思わず、橋の下を見つめる。
そこには黒く深い靄のようなものが立ち込めているばかりだ。
その下の行き着く先を、何となく説明されずとも知っている気がした。
ブルリ、と震えが走る。
「そうでしょう？」
涼介のこの言葉は、拓海に向けられたものではない。
橋の上の、彼女へと向けられたもの。
「ええ。もう這い上がってこられないよう、深淵まで沈めてあげるわ」
ひらひらと、扇が舞い、赤い唇がニィと笑みを刻む。
だとさ。
だから拓海」
涼介が笑った。
諦めた笑みではない。
好きな人に向ける笑みだ。
俺を地獄に落としたいのなら、橋に上がるといい。
だが…俺を不幸にしたくないなら…現実へ帰ろう。俺と一緒に」
命を懸けても拓海を取り戻す。
その決意に変わりはなく、拓海が助かるには自分の命すら捨てても良いと思った。
だが、拓海の母の言葉で気付いた。
その決意もまた、安直な逃げでしかない事に。
拓海に愛される自信が無いのは、涼介もまた同じだ。
だからはっきりと言う事が出来なかった。
『俺と一緒に帰ろう』と。
だが、それではいけなかったのだ。
自分が命を捨て、それで確かに拓海が助かるのなら、それも良いだろう。
だがその前に、涼介は為さねばならない。
拓海の足元に跪き、己の過ちを悔い、許しを乞い、愛してくれと願う事を。
最初から、涼介の臆病さとエゴが招いた過ち。
ただいたずらに命を捨てるだけでは、それはただの逃げだ。
自身の罪に向き合わねばならない。
茶化すように、「帰ろう」と精一杯の気持ちで告げた。
何気なく言ったように見えるが、心中は冷や汗と震えが止まらない。
答えを待つ涼介に、拓海の薄茶色の瞳が向けられる。
うっすら、涙に滲んだ瞳が光に反射しキラキラと輝き、涼介に注がれる。
「…まるで脅しだ」

ふ、と拓海が苦笑する。
俺が…涼介さんに弱いこと知ってて…そう言うんでしょ？
涼介さん、やっぱずるいよ…」
張り詰めていた緊張が一気に解ける。
「…ゴメン」
じわじわと、歓喜が体の奥底から沸き起こる。
「…もう浮気しないで」
出来ない」
しない、ではなかった。
もう出来るはずもない。
本当に欲しいものが手に入ったのなら、まがい物など必要ない。
俺に…ちゃんと触って」
拓海の手が涼介の手を取り、自身の頬へ触れさす。
コクリと、涼介の咽喉が鳴る。
俺を…ちゃんと恋人にして」
無自覚だからこそ、その無垢な艶に心を射抜かれる。
もう駄目だ、と涼介は心の中で拓海に向かって白旗を振った。
心の全部を射抜かれてしまった。
この子がいなくなったら、死ぬどころの騒ぎではない。
生きている意味すらない。
この心の伝え方を知らず、涼介はただひたすら愛しい恋人を抱き締めた。

一緒に帰ろう。
そう、差し出された手を、拓海は拒む事が出来ない。
涼介を信したわけじゃない。
自分に、自信が持てたわけでもない。
ただ、余計な感情を捨てると、残ったのは「涼介が好きだ」と言う気持ちだけだった。
だから、涼介の手を取った。
そして自分の頬へ触れさせた。
涼介の手は汗ばんでいた。
それが、彼の緊張を伝えているようで、ほんのり嬉しくなる。
俺を…ちゃんと恋人にして」
そう告げると、ゴクリと唾を飲み込んだ涼介に力いっぱい抱き締められた。
抱き締められた彼の心臓の音が聞こえる。
トクトクと、激しく波打つ鼓動。
「……馬鹿が」
咽喉の奥から、振り絞ったような呟き。
それが自分に向けて言われた言葉なのだと、気付き少しだけムッとする。
唇を尖らせ、拗ねたように見上げると、ギリリと歯を食い縛り、ギラギラとした眼差しで自分を見つめる涼介がいた。

思わず息を飲む。
「…煽るな。俺はそんなに清廉な人間じゃないんだ…」
意味が分からない。
だが、余裕の無い「男」の顔をする彼が怖くて、拓海は身を竦め、ぎゅっと目を閉じた。
すると、頭上から「チッ」と舌打ちが聞こえ、
「…ふふ」
母の忍び笑う声。
我が橋の前で不埒な…。豪胆な男だこと」
橋姫の呆れ果てたような声がする。
気付けば、唇が暖かいものに包まれていた。
息苦しくて、うっすら唇を開くと、滑った感触が口内に入り込む。
今自分の唇を塞ぐものが何か。
口内に侵入して暴れまわる柔らかく熱いものの正体が何か。
キスをされている。
涼介に。キスをされているのだ。
そう気付いた瞬間、カァっと全身が炎のように熱くなる。
ぴちゃ、と口蓋を舐められ、ゾワゾワと背筋に悪寒めいた感覚が走る。
爪先にまで走り、そして今度は逆に頭上にまで駆け上がってくる。
ぶるぶると足が震え始め、お腹の辺りに熱が溜まる。
心臓はキュウと甘く痛み、割れ鐘のように激しく鳴り響く。
立っていられなくなり、涼介に縋るようにもたれかかる。
すると漸く涼介の唇が拓海から離れた。
ぼんやりと、曇った頭で目を開くと、自分と、涼介の唇の間を繋ぐ透明な筋。
カッ、と全身が朱に染まる。
唾液だ。
涼介と、自分の。
さっきまで互いの唇が重なっていた証拠。
恥ずかしくて、けれど……信じられないほど幸せで。
拓海は思わず自分の唇を両の手のひらで覆う。
品行方正でいようと思ってたんだぜ？橋姫の前だし、何よりお前のお袋さんの前だからな。
自覚してくれ。
お前の何気ない仕草や一言で、簡単に俺の理性なんて崩壊するって事をな」
ボワンとした頭のまま、拓海は振り子のように頭を上下に何度も振る。
そんな拓海の様子に、涼介は甘く、けれどどこか苦さを湛えた顔で微笑む。
俺の臆病さがお前を傷つけたな…。
本当はずっとお前が好きだった。誰かに奪われたくなくて、まだ恋の自覚すら無いお前を、丸め込むように手に入れた。
後悔してるよ。
だが、何度生まれ変わろうと、俺は同じ事をするだろうな。

藤原拓海。
俺はお前が好きだから」
これは夢。
現ではない夢の世界。
だが、涼介の語る言葉。表情は紛れも無い真実。
拓海は、言葉もなく頷いた。
何と返して良いのか、言葉が見つからなかった。
元々口下手だ。
嬉しいと、感じる気持ちはあるのに、その気持ちを伝えられない。
だから、行動で返した。
コツンと、額を彼の肩に乗せる。
そして甘えるように、スリスリと擦りつけた。
それが拓海の精一杯。
涼介の腕が、拓海の腰に回り、やんわりと抱き締める。
お前のお袋さんに言われてたんだ」
降ってきた言葉に、顔を傾け涼介を見上げる。
服を贈ってやれってな」
服。
あのワンピース。
母が、父から贈られた服。
それを大事そうに着る母。
どこか照れくさそうに、けれど誇らしげにしていた父。
それは拓海にとっての幸せの象徴だ。

拓海は花が綻ぶような笑みを浮かべる。
はい」
母のように。
そして父のように。
自分たちも同じ気持ちになれるだろうか？
ずっと…欲しかったんです。服」
幸せな気持ちになれるだろうか？
…そうか」
頷き、そして涼介もまた嬉しそうに微笑んだ。

かつて、何度か恋愛めいた関係を何度か持った事がある。
しかし、それのどれも、純粋とは言いがたく、言葉は悪いが肉欲が勝ったものだった。
拓海のように、その存在の全てが 愛しい」と身の内から沸き起こるような恋は初めてだ。
柔らかな髪の感触を頬に感じる。
細いだけではない、しっかりと形造られた骨格と、覆う筋肉。
それら全てに胸が焦がれ、愛らしくて堪らない。
ようやく腕の中に収めることが出来た愛しい恋人の感触を、涼介は飽きることなく感じていた。
だが、その至福の時間が終わりを告げるのは早かった。

「ホン」
咳払いの音と、パシンと音高く鳴る扇を叩く音。
その音に、まず拓海が真っ先に我に返った。
慎みなさい。ここをどこだと思っているの？」
拓海には柔らかに。
しかし涼介には険のある響きで語る橋姫に、涼介は心の中で舌打ちをした。
パッと、慌てたように拓海が涼介から飛びのく。
名残惜しげに、涼介の腕が拓海を抱え込んだ時の腕のまま固まる。
ご、ごめんなさい！」
謝る必要などないのに、と涼介は拓海に対し微笑ましく、そして咎めた相手に対し忌々しく思う。
良かったわね、拓海」
だが、拓海と似た顔で、同じ笑みを刻む人に関しては、その爪も緩む。
苦笑し、彼女に向け頭を下げた。
：お母さん」
ホロリと、拓海の瞳から涙の粒が零れる。
無言のまま、涼介はその涙を拭った。
そして、彼女に向け安心させるように、拓海の肩を抱き締める。
その意図を察したのだろう。彼女はしっかりと頷いた。
拓海をお願いね」
涼介もまた、頷いた。
「ちょっとぼんやりしたところのある子だから心配してたのだけど、あなたとだったら安心ね」
これに頷いたのは拓海だった。
：うん」
それに、涼介が無常の喜びを感じる。
柄にも無く、顔がにやけそうで手のひらで顔を隠す。
どうかしら？私には拓海が危険にしか見えないけれど」
ひらひらと、扇を揺らしながら言う橋姫に、その笑いが消え怒りが湧く。
しかし、「ふふふ」と軽やかな笑みを零す母に気が殺がれた。
さらに、
大丈夫よ。彼はもう同じ間違いは犯さない。
ね？そうでしょう？」
笑顔で言われた言葉に、涼介は内心苦い気持ちになる。
これは、暗に「もう拓海を泣かすな」と、釘を刺されたのだろう。
さすがあの父の妻にして、この子の母。
一筋縄でいかない。
涼介ははっきりと頷いた。
はい。必ず」
彼女が頷き、スッと涼介たちの背後を指さした。
なら、もうお戻りなさい。帰り道が分からなくなる前に」
頷き、涼介は拓海の手を取り、彼女が指した道へ歩もうとした。
しかし、拓海が動かない。

「…お母さんは？」
拓海の視線は、母に留まったまま動かない。
お母さんは、どうするの？帰らないの？！」
泣く寸前の、子供の顔。
そんな拓海に、母がピシャリと嗜める。
お母さんは死んだのよ、拓海」
震える細い肩。
涼介はその肩を抱き締めた。
それが、自分の役目だと悟り。
そしてそれは間違いではないのだろう。
だからもう戻れないの。
お母さんが行くところは、この橋の向こうよ。
だから拓海は帰りなさい」
彼女の傍らに立つ橋姫が鷹揚に頷く。
拓海は惜しいが、これまた綺麗な魂。歓迎するわよ」
ゆらりと、さっきまではっきりと見えていたはずの橋の袂が消える。
もう…会えないの？」
消えていこうとする橋。
その上で彼女が鮮やかな笑みを見せる。
会えるわよ」
まるで虹が消えるように、橋が先から消えていく。
きっと、また生まれ変わって、あなたたちの元へ帰るわ。
だから、それまでさよならね？」

お母さん！」
その言葉を最後に、橋が消え、二人の姿も消える。
涼介は拓海の肩を抱き、そして、
行こうか」
彼女を促し、元来た道を歩んだ。

アニキ！…アニキ！」
揺り起こされ目を開けた。
ハッとし、身を起こすと、白い壁と白いシーツ。
そしてベッドの上で眠ったままの拓海。
目を瞬かせ、自分が拓海の病室で眠っていた事を理解する。
「…夢、か」
ゆっくりと首を振りながら、目を開ける前の情景を振り返る。
目覚める前に、確かに掴んでいた手。
ふと自分の手を見ると、そこには拓海の手がつながれていた。
彼女の指はしっかりと自分の手を握っている。
ドクン、と心臓が期待に跳ねた。
びっくりしたぜ…。藤原の様子を見に来たら、アニキまで藤原のベッドに突っ伏して寝込んでるだろ？
アニキまで目を覚まさないんじゃないかと思ってさ…」
啓介」

肩に置かれた手。
振り返ると、いつもの陽気さを失わせた弟がいた。
無理やりのように笑顔を作るが、やはりそれは引きつったままだ。
涼介の肩に置かれた啓介の指が微かに震えている。
なぁ、アニキ…こいつ、このまま眠ったままってこと…ねえよな」
啓介は情が深い。
ライバルと目す相手のこんな状態に、動揺を抑えきれないのだろう。
また、啓介は涼介と違い、「死」に向き合い慣れていない。
さっきまで元気だった人間が、突然目を覚まさなくなる。
その事実が今啓介に圧し掛かっているのだろう。
不安。
そして遠いと感じていた「死」が、自分の隣にも存在すると言う恐怖。
涼介は「ッ」と口元を緩ませた。
そう言った意味では、さっきまで涼介は死を間近にしていた。
あのまま、死んでもおかしくはなかったろうほどに。
だが、自分は死ななかった。
そして、拓海も。
「大丈夫だ」
はっきりと、涼介は断言した。
そして繋ぐ手に力を込める。
くしゃりと、啓介の顔が泣きそうに歪む。
「大丈夫って、何の根拠があって言うんだよ?！
現に藤原は目が覚めねえじゃないか！」

フフフと、涼介は場にそぐわない、楽しげな笑い声を上げた。
それに啓介が眉を顰める。
「目覚めさせ方があるんだ」
涼介の、手を繋いでいない方の手が拓海の頬を撫でた。
視線はもう、啓介から拓海にのみ注がれている。
「目覚めさせ方?」
不審そうな啓介に構わず、涼介は拓海に覆いかぶさるように顔を寄せる。
「おとぎ話の通りだ」
そして、眠る拓海の薄桃色の唇にキスをした。
触れるだけどの、優しい口付け。
「王子様のキスで呪われた姫は目覚める」
涼介の突然の愚行としか思えない行動に、啓介が唖然とする。
「アニキ…何言って…」
咎めかけた啓介の言葉が途中で止まる。
微笑む涼介の目の前で、ゆっくりと長い睫に縁取られた瞳が開いていく。
ゆっくりと開き、薄茶の瞳が涼介を見つめ返す。
何度か、確認するように瞬き涼介を見つめ、そして少女は微笑んだ。
「…涼介さん」
笑みを刻む唇に、涼介はキスをする。
今度は、さっきよりも深く。
「お帰り。藤原」

カァ、と目覚めたばかりの少女の頬がみるみる真っ赤に染まる。
恥ずかしそうにシーツを引っ張り唇を隠し、けれど小さな声で告げた。
「ただいま。涼介さん」
やっと、手に入れた。
箍が外れたように、涼介は横たわったままの拓海の体を引き起こし抱き締めた。
夢の中で、あの橋の上で、抱き締めた体。
腕の中のそれは、あの時に感じたのと同じ、いやそれ以上の感動を涼介に与えていた。

目を開ければ涼介がいると思った。
そして実際に、微笑んだ涼介の顔を真っ先に見て、拓海は嬉しくなって微笑んだ。
「涼介さん」
名を呼ぶと、涼介の顔が近付いてきて、夢の中と同じようにキスをされた。
いや、夢の中よりも生々しい。
唇どころか、体全部が涼介を感じて喜びに震える。
嬉しくて、恥ずかしくて、何だか自分の唇が物欲しげにまた涼介に向かいそうで、シーツで口元を隠した。

そんな拓海に、涼介の笑顔は深くなる。
「お帰り」の言葉に、小さな声で「ただいま」と返すと、力いっぱい抱き締められた。
鼻腔に届く涼介の匂い。
それを嗅ぎながら、拓海は不思議な思いを感じていた。
夢。
そう断言するには生々しい夢。
橋の上で出会った人。
橋の上で、拓海を咎めた母。
本音を晒し、子供のように泣き、そして一番欲しかったものを手に入れた。
不思議な夢…。
目が覚めても、涼介は微笑んでくれるし、キスもしてくれたし、今も抱き締めてくれている。
恋人、のつもりで良いのかな？
抱き締める腕の中、少し身動ぎして涼介を見上げる。
「どうした？」
見返してくる眼差しは蕩けそうなほどに甘い。
ボワッと赤面しながら、拓海は慌てたようにフルフルと首を横に振った。
嬉しさを堪えきれない涼介の瞳。
今まで見たことがないほど、柔らかい笑顔。
良かった…。

拓海も、にっこりと笑みを浮かべる。
どうやら、恋人のままで良いらしい。
ホッと安堵しかけた拓海だが、すぐにその落ち着きは崩れる。
†……あのさぁ」
第三者の声によって。
パチと目を見開き、抱き締められた腕の中、涼介の背後に視線をやれば、そこには彼の弟の姿。
†……これって、どう言うワケ？」
あきれ果てたような啓介の声と、表情。
ハッとし、拓海は涼介の腕から逃れようとしたが、涼介がもちろん逃すはずもない。
見た通りだ。目覚めなかった恋人が目を覚まし、喜びを分かち合っているところだ」
恋人。
やっぱり恋人なんだ。
わわわ、と場違いなほどに、拓海はその言葉に喜びを噛み締める。
涼介の背後から、「ア」と溜息が聞こえた。
「ニキと藤原が恋人同士？…聞いてねえんだけど？」
涼介の腕が緩んだ。
名残惜しくて、シャツを掴んだまま見上げると、涼介は優しく微笑み、シャツを握り締める拓海の手を宥めるようにゆっくりと撫でた。
拓海に優しい笑みを。
けれど啓介を振り返った時には、涼介の表情は厳しいものに変貌していた。
ああ。黙ってたからな」
チッと啓介が舌打ちした。
†‥今は隠さねえの？」
さも、気に喰わないと言わんばかりの啓介の表情に、ズキリと拓海の胸が痛む。
ああ。隠す必要がないからな」
やはり啓介は嫌なのだろう。
尊敬する兄の恋人が、自分なんかでは…。
「……何か…ムカつくんだけど、それ…」
啓介の歯噛みしたような言葉。
それに、拓海は やっぱり！」と唇を噛み締める。
以前のままの拓海なら、そこで俯き、無言のまま涼介から離れただろう。
だけど、拓海はもうそれは出来ない。
誰に認めてもらえなくても、甘く抱き締めてくれる涼介を知ってしまったら、もう手放せないのだ。
誰が何と言おうと。
あの！…ごめんなさい」
唐突に叫んだ拓海に、二人の視線が集まる。
†‥ご、ごめんなさい、啓介さん」
告げると、啓介が目を見開き、驚きの顔で拓海を見つめる。
はぁ？！何で俺に？…謝るのは藤原じゃねえだろ」

チッ、とまた舌打ちされて拓海の心が竦む。
けれど、負けてはいけない。
だ、だって気に喰わないんでしょ?:俺と…その、涼介さんが…」
あ〜…まぁ、そうだけど…でも、それは藤原がっつーんじゃなくって、アニキが…」
だから!あの…お、俺なんかじゃ涼介さんにつり合わないこと、分かってます!気に喰わないだろうけど…でも、我慢して欲しいんです」
一瞬、言われた意味が分からないと、啓介の顔がポカンと固まり、そしてすぐに「ア?!」と大きな声を上げた。
俺…俺…涼介さん…好きだから…何て言われても…離れたくないんです。…すみません」
ベッドの上で、拓海は啓介に向かい頭を下げた。
許さない。
そう言われても仕方ない。
けど、どうしてももう離れることは出来ない。
だから、啓介には諦めてもらうしかないのだ。
じっと頭を下げたまま啓介の言葉を待つ。
しかし、いつまで経っても啓介の返事が無い。
おそるおそる顔を上げると、照れくさそうに微笑む涼介と、苦虫を噛み潰したような啓介の顔。
ギラリ、とその険のある眼差しが拓海を射抜く。
だがすぐにその視線は涼介に向かい、
「アニキの悪党!」
と、詰った。
意味が分からず、ぽかんとする拓海の前で、啓介は火が付いたように怒鳴り出した。
涼介に向かって。
「:こんな健気なヤツ誑かして…良心が痛まねぇのかよ!」
ビクリと竦む拓海とは裏腹に、詰られているはずの涼介はどこ吹く風だ。
痛むよ。だから大事にするさ。命がけでね」
「:ッ〜!何が命がけだよ!今までも、そいつの情緒不安定だったのとか、全部アニキのせいだろ!」
「:否定できないな。感情が袋小路に迷い込んだ末の過ちだ」
意味わかんねぇ!今回のこともそうだったんだろ?:!」
「……まぁな」
漸く、拓海にも理解し始めてきた。
啓介が怒っている理由。
それは拓海のためなのだと。
二人の遣り取りを見ながら、拓海は唖然としながらも、心の中でホッとした。
良かった。
啓介には嫌がられてはいないらしい。
だったら!そんな藤原をまだ捕まえとこうってぇ根性が許せねぇんだよ!泣かして、命まで危なくさせといて、またのうのうと藤原とく

っ付こうってのか？！図々しいんだよ！」
「…確かにな。だが、仕方ない」
何が仕方ないんだよ…」
藤原がいなければ俺が死ぬ」
は？」
え？」
きょとんと、拓海は涼介を見上げた。
藤原がいない人生など考えられない。藤原が俺を嫌って、もう顔も二度と見たくないと言われても仕方ない事をしたと思ってる。
だがもしそうなったら…俺はその瞬間から生きる屍だ。生きている意味すらない」
ぎゅっと涼介のシャツを掴む手に力が篭る。
心の中で、何度も彼の名を呼んだ。
「…な、に言って…」
もし他の男と付き合おうものなら…殺すだろうな」
啓介を振り向く涼介の背中に、ぴたりと額を押し当てる。
感じる熱と、鼓動。
じわっと、好きだなぁという感情が心臓から末端まで、血液と一緒に循環して、拓海の全身に網羅する。
どっちを？」
相手の男を」
藤原は？」
俺が藤原を殺せるはずがない。……何より大事なのに」
良いかな？良いよね？許してくれるよね？
そうっと、拓海は腕を涼介の腰に回す。
抱きつき、ぎゅうっと涼介に縋りつく。
ハァ、と呆れたような啓介の溜息が聞こえた。
だけど、拓海にはそれはもうどうでも良いことのように感じた。
「……だったら最初から泣かせんなよ」
「…そうだな。俺が愚かだった」
涼介の腰に抱きつく拓海の腕に、涼介の手が触れる。
「…アニキを許したんじゃねえからな。
バカみてえにアニキにベタ惚れな藤原に免じて諦めてやるんだからな！」
何となく気が付いた。
前の自分は、愛される資格が欲しかった。
涼介に愛されたかった。
でも、そうじゃないのだと橋に立ち気が付いた。
愛されたいと願う前に。
精一杯の想いで、涼介を愛さなければならなかったのだという事。
もう、間違えない。
同じ気持ちで、涼介が拓海の腕を愛しげに擦る。
ああ」
髪に、涼介のキスが降る。
大事にする」
目を閉じると、最後に見た母の鮮やかな笑顔が思い浮かぶ。

――そう言う事なんだよね。お母さん。
正解よ、と、どこかで母が囁いた気がした。
拓海は、もうあの橋の上に立つことはないだろう。
再び立つ時が訪れるとしたら、そこにはきっと橋姫ではなく、涼介が拓海の手を握っているに違いない。

恥ずかしい。
こんなに恥ずかしいものだと思わなかった。
けれど、あの綺麗な顔で、
『着てくれるだろう？楽しみにしてるよ』
なんて、嬉しそうに言われてしまえば断れるはずもない。
うううう、と唸りながら、拓海は「ええい」と勢いを付け、ハチロクのドアを開けた。
救いは、今が夜で見通しが悪いと言うことだろうか。
照らす光は、集まる車のライトばかり。
けれど無数に光る灯は、ホタルなどのように頼りないものなどではなく、眩いレーションのような光。
気にするからいけないんだ。
目立たない目立たない…。
そう言い聞かせ、ハチロクの外に出る。
場所は赤城。

Dのミーティングと言う事で、チームの皆だけではなく、噂を聞きつけ集まったギャラリーも居並ぶ中だ。
本当なら、ひっそりと涼介だけにお披露目したかったのに…。
『今度のミーティングに着てきてくれよ』
なんて、有無を言わさず承諾され、仕方なく、運転向きとは言えない服装で峠に来てしまった。
シートから降りようとした瞬間、薄いスカートの短い裾がひらりと捲れ上がる。
うううう、と唸りながら拓海は裾を押さえながら立ち上がる。
やっぱり恥ずかしい…。
こんな格好をし慣れていないのもあるが、チームの皆に見られるのが気恥ずかしくて仕方ない。
けれど、涼介のお願い。拓海が断れるはずもない。
おまけに、何故か髪もスタイリングさせられ、メイクまでしてしまっている。
涼介の従妹だという緒美とは何度か面識があったが、まさか渋川の豆腐屋にまで押しかけてくるとは思わなかった。
『涼兄から聞いてるわ。今日は拓海ちゃんを可愛くしてあげるね？』
なんて、タクシーでやって来た清楚な少女は、大きなメイクバッグを片手に藤原家に上がりこみ、
『：化粧ってなぁコエーなぁ…』
と、見るとはなしに眺めていた文太にそう呟かせた。
だから今の拓海は、上から下まで全てフルスタイリング。

見てない。見てない。きっと誰も見てない。
そう言い聞かせ、ライトの中心にいるだろう涼介に向かい歩き出す。
しかしその瞬間、ザワっと空気が動き、しん、と静まった。
拓海の動きもピタリと止まる。
おそるおそる周囲を見回すと、皆の視線が自意識過剰などではなく、拓海を見て固まっている。
ぽかんと大きく口を開け、闇夜ではあるが、何故かうっすら頬が赤く染まっているように見えた。
――や、やっぱり変なんだ！
拓海は自分の姿を見返した。
柔らかな真っ白なワンピース。
襟ぐりは大きく開き、縁にフリルが飾られ、ストンと体に沿ったラインにアクセントを加える腰に巻かれたサテンのリボン。
足元はヒールに慣れていないからと、ぺったんこのバレエシューズ風のパンプス。
ブワァと一気に顔が赤くなる。
まじまじと凝視してくる視線が居た堪れなくて、うろうろと視線を彷徨わせた先に、目当ての涼介の姿が垣間見えた。
その瞬間、もう勝手に足が動いていた。
ひらひらと人と車の間を白い布が閃く。
駆け出した拓海の先には涼介がいる。
泣きそうな表情で駆け寄る拓海を、迎えるように涼介が大きく手を広げた。
「拓海」
吸い込まれるように、拓海はその腕の中に飛び込んだ。
見た目よりも逞しい腕に抱かれ、漸く拓海はほっと息を吐く。
腕の中の拓海の姿を見下ろし、涼介が満足そうに微笑んだ。
着てくれたんだな。…良く似合う。可愛いよ」
拓海は俯いたまま否定するように首を横に振る。
「……恥ずかしい。…変です」
変じゃないよ。良く似合ってる。どうしてそう思うんだ？」
う…だってみんな見てる…」
チラリと顔を上げ周りを見ると、やはりみんなこっちを見ている。
さっきのぽかんとした表情とは違う、今の顔は皆、「ええ？！」と叫び出しそうな驚きの表情。
そこでハッと拓海は気付く。
何も考えずに動いてしまったが、自分みたいなのが涼介に飛びつくだなんて、とんでもないと思われてるに違いない。
慌てて、離れようとするが涼介が逃がすはずもない。
「こらこら。どこかへ行こうとしない。拓海の定位置は俺の傍だろう？」
また腕の中に抱き込まれ、拓海は往生際悪くジタバタと暴れる。
だって…！みんなびっくりしてます！！」
ゆらりと涼介の顔が持ち上がり、自分たちを見つめる視線全てを厳しい眼差しで見回す。
「…チッ」

舌打ちは小さく微かに。拓海に聞こえないほどの。
ああ。みんな拓海が可愛くてびっくりしてるんだろう？」
そして周囲に向けていた視線とは裏腹の、甘やかな眼差しで拓海を見下ろす。
「……涼介さん目が腐ってます」
酷いな」
己を知らない。それが一番罪だ、と心の中で涼介が溜息を吐いたが、もちろん拓海は気付かない。
拓海からしたら口喧嘩。
しかし周囲から見たら立派なイチャつき。
そんな二人に声をかける勇気のある人間は、いや、貧乏くじを常に引いてしまう人間は、チーム内に今のところただ一人しかいなかった。
「…あ～…涼介」
涼介を呼ぶ声に、拓海は言い返そうとした口を閉じた。
声をかけたのは史裕だ。
ぎろり、と涼介の視線が史裕に向けられる。
途端、史裕の顔が眇められ、額に三本皺が寄る。
「…何だ？」
その、彼女、は…その…」
ああ。俺の大事な恋人だ」
しれっと答えた涼介に、拓海の方が赤面してしまう。
「、コイビトって…！その…俺の目には彼女がハチロクから出て来たように思えたんだが…」
ああ。当然だろう？俺の恋人は藤原だからな」
その瞬間、峠に静寂が訪れた。
しかし、三秒後。
静寂は消え、峠にいた人間は皆、同じ言葉を叫んだ。
藤原ぁ？！」
皆から自分の名を叫ばれ、目を見開き顔を上げると、呆然としていた史裕と目が合った。
驚き果てたようなその姿に、やはり自分なんかが涼介と付き合っているというのは、とんでもないことなのだなと、申し訳ない気持ちになり、史裕に向かい目だけで謝罪すると、彼の瞳がカッと見開き、そして涼介をギラリと睨んだ。
「この…悪党！」
どこかで誰かが叫んだのと同じ言葉。
そう詰られた涼介は、どこ吹く風で平気な顔だ。
まぁ、自覚はしてるよ」
しらっと答え、ますます史裕の顔はいきり立つ。
藤原みたいな純真な…おまけに、こんな可憐な…お前！」
何を言いたいのか分からないが、どうも涼介に向かい怒っているようだ。
だが史裕の詰りに、涼介は ヲ」と笑った。
純真で可憐で健気で、さらにドラテクは俺を負かすほど。

これ以上ないくらいの最高の恋人だろう？」
堂々とのろけられ、いきり立っていた史裕の勢いが弱まる。
そして涼介は史裕だけではなく、周囲にいるチームのメンバーのみならず、居合わせたギャラリーの面々にまで聞こえるように声を張り上げた。
藤原拓海は俺の恋人だ。
何か文句があるか？」
し、んと峠中が静まり返る。
拓海は、涼介の腕の中で、じわっと涙を滲ませていた。
こんな風に、涼介がみんなに堂々と拓海と付き合っていると公言するのは初めてのことだ。
そして、彼がこんな風に宣言するように知らしめたのは、拓海のためだ。
愛されている自信がなく、どこか不安を抱えたままの拓海のためなのだと。
そんな彼のために、拓海が出来ることは一つ。
しっかりと腕の中に抱え込む涼介から逃げず、彼の隣で幸せそうに微笑む事。
唖然と見つめてくる周囲の視線に臆せず、拓海は顔を上げニッコリと微笑んだ。
その瞬間、「ぐぅ」と何やら苦いものを飲み込んだような音がアチコチから上がる。
――そんな変な顔だったかな？
奇妙な反応に気後れを感じて、ペシペシと自分の頬を叩く。
そんな拓海の頭上で、「チッ」と大きく舌打ちの音がした。
「拓海に手ェ出すなよ…俺のだからな。覚えとけ」
おどろおどろしい声音で周囲の牽制する涼介に、拓海はそんな必要ないのに、と少しだけ可笑しくなった。
痛いほどに切なく、焦がれていた恋人は、どこまでも甘く優しく、そして少し心配性だ。
ひらひらと閃く、柔らかなワンピース。
憧れていた母のように、大切な人からの大切な贈り物。
その贈り物が、贈り主によりラッピングを剥がされるのは今から三時間後。
そして今度は真っ白なドレスを贈られ、左手薬指にお揃いの指輪を付けるのが三年後。
さらに、二人の間に、愛らしい彼女に良く似た女の子が生まれるのは五年後の事だ。
過去も未来も見通す彼の女が、橋の上で拓海に良く似た女性を相手に「本当にあの男は！」と嘆いたのも知らず、拓海は涼介の傍らで幸せそうに微笑んだ。

――完

夜の橋　-その後-

こんにちは。初めまして。
なんやと申します。
この度はこの本をお手に取って頂き、誠にありがとうございます。
出来るなら新作で本を出したかった…んですが、時間、体力的に困難で、Web の再録と言う形になってしまいました。

今回はあえて、ちょっとアニキがサイテーな感じで、さらに拓海が健気っ子で、さらに女子設定と言うお話ばかりを集めてみました。

色々力不足なところなど多々ありますが（特に誤字・脱字…）微妙に見逃していただけるとありがたいです。

それでは、少しでもこの本を楽しんで頂けたら幸いに思います。

なんや

女子を怒らせると恐いよ、涼介さん…。

花霞

カチコチカチコチ。
一人の夜はやけに時計の針の音が響く。
ガランとしただだっ広いマンション。
かつて住むことすら想像しなかった場所に拓海はいる。
けれどその事実は、拓海を幸せにすることは無く、苦しさだけを強いる。
時刻はもう深夜。
テーブルの上に冷えた料理。
今日も帰ってこないだろう。
分かっていながら食事を作る。
それは拓海の未練のようなものだ。
ふ、と零れた溜息がやけに重苦しい。
分かっていたはずだ。こんな事態は。
分かっていながら彼と結婚した。
「…涼介さん…」
呟いた声が、一人の部屋に響いた。

拓海がその話を聞いたのはもう十年以上も前の話だ。
まだ六歳のとき。
親に連れられて行った大きなお屋敷で、その男の子に会った。
拓海は小学校一年で、彼は小学校六年だった。
優しくて綺麗なお兄ちゃん。
それが拓海の将来の旦那様なのだと教えられたのは、家に帰ってからの事だった。
『お母さんと向こうのお母さんとでお約束してるの。拓海が嫌だったらお断りするけど、どうかしら?』
いつも儚い、けれど柔らかな笑顔の母。
その母が、ほんの少し困った顔で拓海に問いかけたとき、拓海は迷うことなく頷いた。
『たく、お兄ちゃんのお嫁さんになりたい』
初恋だった。
そしてその初恋は12年経った今も続き、とうとうその夢は叶った。

形だけ。

十二年振りに会った拓海の許婚は、12年前のままでは無かった。
体格は遥かに大きく、容貌は端整なものに。
そして心は凍えて冷たいものに。
拓海と顔を合わせるなり、彼は言った。
「正気ですか?」
拓海を一瞥し、彼の両親に向かって。

何の後ろ盾も無いこの子が俺の結婚相手？そんなメリットの無い結婚に何の意味があるんです」
その瞬間に、ピシリと拓海の大事に抱えていた淡い心に傷が走る。
メリットとかじゃないわ。私たちはあなたと拓海さんを結婚させる。そう約束したのよ」
そうだ。それは果たさなければならない。実際、お前も了承したじゃないか。拓海さんとの結婚を」
俺がですか？いつ」
お前が小学校六年の時だ」
彼は、さも下らないことを聞いたとばかりに鼻で笑った。
そんな戯言！十二年も過ぎれば無効ですよ」
だが約束したのは事実だし、それに拓海さんにはもう…戻る家が無い」
どういう意味です」
「……亡くなられたんだ。清海さんは十年前に。ご主人の文太さんは先月…」
儚い笑顔の母は、その表情の如く儚い命の人だった。
心臓が元々悪く、長く生きられない人だった。
そして十年近くを二人で悲しみを堪え、支えながら生きてきた父は先月、呆気なく事故で亡くなった。
飛び出してきた子供を避け、突っ込んできたトラックと正面衝突。
無口ではあったが、優しい父らしい死に方だった。
天涯孤独となった拓海に手を差し伸べたのは、かつて両親の親友でもある高橋夫妻だった。
そして彼らは拓海にこう言ったのだ。
『拓海さん。約束を覚えてる？』
それを果たしても良いかと、そう。
涼介が突然ハハと声を上げ笑った。
成る程。亡くなられた親友との約束を大事にしたいわけだ。
分かりました。あなた方のセンチメンタルに付き合いましょう。俺は彼女と結婚します」
涼介の目が拓海に向かう。
冷たい目だった。
哀しくなるほど。
けれど」
切なくなるほどに。
俺は彼女を愛さない」
冷たい顔のまま涼介は笑った。
それでも良ければ、どうぞご自由に」

ガタンという音で我に返る。
物音がした事で彼の帰宅を知った。
時刻は午前一時。
慌てて玄関に向かうと、涼介は拓海の顔を見るなり不機嫌そうに舌打ちをした。

「……まだ起きていたのか」
あの…お帰りなさい」
脱いだコートを受け取ろうと拓海が手を伸ばす。
けれど涼介はそんな拓海を無視して横を通り過ぎた。
その瞬間、彼のものではない香りが漂う。
甘く、官能的な大人の女の匂い。
ピシリ、とまた心にヒビが走る。
涼介がキッチンのテーブルの上の料理に目を留め、拓海を振り返る。
料理も作らなくても良い。待たなくて良い。そう言ったはずだ」
不機嫌を絵に描いたような表情。
拓海は萎縮し、俯くことしか出来ない。
「…すみません…でも…」
小さな声で、けれど自分の心を伝えようとする拓海を、さえぎるように涼介の舌打ちが止める。
君には学習能力が無いのか？」
顔を上げた拓海の目に、侮蔑の眼差しで自分を見つめる涼介が見えた。
「…不愉快だ。二度と同じ事を言わせるな」
それだけ言い放ち、涼介は自室に入り扉を閉めた。
今日もピシリ、ピシリと拓海の心に幾つも傷が走る。
けれど拓海はそんな傷だらけの心を大切に抱え、ふわりと笑みを浮かべた。
「…良かった。今日は涼介さん帰ってきてくれた」
かつての、母親そっくりの儚い微笑みを。

まぁたアニキは食わなかったわけ？」
深夜遅くに帰ってきた涼介は、食事も取らずに出勤した。
『あの、食事は…』
問う拓海に、冷たい眼差しだけを残し。
涼介が拓海の作る料理を食べないのは今だけのことではない。
結婚して三ヶ月。
一度として涼介は拓海の食事に手を付けようとはしない。
そして残された料理は、全て今拓海の目の前にいる男の胃に消える。
お前もさぁ、もう作らなきゃいいじゃねぇか。アニキって頑固なところあるから、食わねぇって決めたら絶対に食わねぇぜ？」
バクバクと、涼介とは正反対に「うん、美味い！」と喜びながら平らげているのは彼の弟である啓介だ。
最初は政略結婚である二人の仲を反対していたのが、涼介の冷酷とも言える拓海への態度に、一転同情し、拓海にいつも優しくしてくれる。
『つか…食べてくれるかも知れないから…』
そう言う拓海に、クシャリと啓介は痛そうな顔になる。
「…バカだな、お前」
拓海はコクンと頷いた。
『バカなんです、俺…。バカだから…いつも涼介さんを怒らせてる』

カタンと啓介が空になった皿をテーブルの上に置く。
そして箸をちゃんと揃え置き、「ごちそうさん」と手を合わせた。
そんな啓介に、拓海は笑みが零れる。
粗野に見えて、啓介は礼儀正しく、そして優しい。
お粗末様です」
空になった器を片付け、キッチンのシンクに浸し洗う。
そんな拓海の後姿をじっと見つめていた啓介が、ぽつりと口を開く。
なぁ」
何ですか？」
お前…イヤとかになんないわけ？アニキのこと」
どうしてですか？」
だってさ、あんなに冷たくされて、普通はイヤになるだろ？」
拓海は洗う手を止め、ほんの少しだけ考えた。
「…ならないですよ」
そしてまた洗い始める。
何で？結婚しなきゃ良かったとか思わないのか？」
思わないです」
次の問いは迷わない。
アニキにあんなに冷たくされても？」
また洗う手が止まる。
流れたままの水音がザァザァと雨のような音を立てる。
涼介さんは……優しいです」
ハァ？どこがだよ」
俺と…結婚してくれました」
「……」
本当はイヤなのに、結婚してくれました。だから…いいんです」
ザブザブとまた洗い始める。
背後で、啓介の溜息が聞こえた。
「……本当のバカなんだな、お前」
そうかも、知れないですね」
洗い物を終え、蛇口を止める。
手を拭き、啓介を振り返り、にこりと明るく微笑んだ。
そうだ、啓介さん。オヤツあるんですけど食べます？」
オヤツ？何？」
啓介は辛党の甘党だ。
酒も甘いものも両方好き。そしてそれは涼介も同じ。
クッキーです。おからで作ったんで、健康にも良いですよ」
おからぁ？不味いんじゃねぇの、それ？」
美味しいと思ったんですけど…どうでしょう？啓介さん、味見してください」
何だよ、俺は毒見かよ」
文句を言いながらも、差し出されたクッキーを手に取り、口に含む。
コクリと嚥下し、そして目を見張る。
「……うめぇじゃん」
良かった。今、紅茶用意しますね」
手際よく紅茶をサーブする拓海を見ながら、また啓介は溜息を吐

く。
「…アニキもバカだよな。こんな料理も美味くて気も利いて、可愛い嫁さんがいるのにさ」
啓介の呟きを聞いた拓海が、それにプッと噴出す。
「何ですか、それ。おだてても何も出ませんよ?」
「いや、もう十分。お前、客観的に見てスゲェ良い嫁さんだぜ?俺んトコに嫁に来れば良かったのに」
「何、言ってんです……」
笑いかけた声が途中で止まった。
拓海の腕を啓介が掴んでいる。
そしてその表情は先ほどの軽口とは違い、真剣なものだった。
「マジだって。お前、アニキじゃなくて俺と結婚しろよ」
「…啓介さん?」
拓海は一瞬戸惑い、けれどすぐに「ふ」と微笑んだ。
「啓介さんは優しいですね」
「…そうじゃねぇよ、俺は…」
「俺はそんなに可哀想に見えますか」
「……」
拓海の腕を握る啓介の手が緩む。
「哀れんで、優しくしてやらなければいけないほど、俺はそんなに可哀想に見えますか?」
拓海は腕を引き戻し、そして泣き笑いの表情を啓介に見せる。
「そんな優しさ、…俺には痛いです」
「まだ…アニキがくれる痛みの方がマシ?」
拓海はコクリと頷いた。
「他に女がいても?」
啓介の声が震えていた。
優しい人なのだ、啓介も。涼介も。
だから大丈夫。
俺が…一番こわいのは期待して裏切られることです。でも涼介さんは最初から期待するなって言ってます。だから……俺は嬉しいんです」
期待する事は再会したあの日に諦めた。
簡単なことだ。
拓海は前のまま、涼介を好きでい続けるだけで良い。
たとえ同じ思いを返されなくても。
裏切られることは無いんですから」
他に女がいる事なんてすぐに分かった。
遅くに帰宅する彼から香る甘い匂い。
それが何であるのか、分からないほど拓海は子供じゃない。
胸の痛みは最初だけ。
後は麻痺して分からなくなった。
いや、最初から形だけの妻なのだから、他に女がいてもおかしくは無いだろう。
お前……本当にバカ…」
啓介が拓海の肩を掴み引き寄せた。

そして柔らかく拓海を抱きしめる。
親愛の。
同情の抱擁。
「啓介さん…泣いてるんですか？」
「カヤロウ…これは心の汗だ」
「ふふ、啓介さん、何だか本当の弟みたい」
「お前の方が年下だろうが。お兄様と呼べ」
最初は柔らかかった抱擁が、どんどんギュウギュウと強いものになる。
頭上から聞こえる鼻を啜る音。
「…本当に…啓介さんを好きになれば良かった…」
不器用なまでの優しさに触れて、うっかり漏れてしまった本音は幸い啓介の耳には届かなかった。
拓海は、暫くその優しさに甘え目を閉じた。

大丈夫。大丈夫。
拓海は自分の胸に両手を当て、言い続ける。
トクトクと小さな鼓動の音が聞こえる。
大丈夫。大丈夫。
これはまだ動いてる。
だから。
大丈夫。

その夜、珍しく涼介は早く帰ってきた。
「お帰りなさい」
嬉しくて笑顔になった拓海を、けれど涼介はいつもの不機嫌な表情で見返す。
「あの、ご飯は？」
「いらない」
涼介の鞄を受け取ろうと手を伸ばすが、また無視される。
無言のまま涼介はリビングに向かい、そしてソファに座り、視線だけで拓海にも同じように座ることを命じた。
涼介の向かい、カーペットの上に直に座る。
「……啓介に怒鳴り込まれた」
そして唐突に涼介は話し始める。
「啓介さんが？」
驚き、顔を上げたその視線に、苦虫を潰したような涼介の顔がある。
その表情だけで、拓海は啓介が何を言ったのかを想像出来た。
涼介はまた無言のまま鞄を開き、一枚の紙を取り出す。
それをテーブルの上に置き、トンと指で示す。
拓海はそれに目を留め、驚きに目を見張った。
「これ以上悪者にされては適わない。元々、不自然な形であったのだから、こうなるのが正しいと思う」
テーブルの上の紙。
それは離婚届だった。

もう涼介のサインは済んでいる。
君も、義理などで我慢を強いる事は無い。どうしても高橋家との婚姻と言う形を結びたいのなら、啓介はどうだ？あいつも気がない訳ではないのだろう。やけに君に肩入れしていたからな」
ドクドクと心臓の音が早くなる。
拓海はぎゅっと胸の部分を掌で掴む。
お、れは…でも…」
唇が震え、上手く言葉が出て来ない。ただ首を横に振り続けていると、涼介の舌打ちが降ってきた。
「…飲み込みが悪いな。いいか、俺が迷惑なんだよ。最初は五月蝿い女たちへのカモフラージュに丁度良いと考えていたが、今はもうその必要が無いんだ。意味が分かるか？」
分かりたくは無かった。
けれど分かってしまった。
いや、気付いていた。
涼介に恋人が出来たこと。
酷いようだが、君の存在が邪魔なんだ。君のその捨てられた犬のような態度も、俺には重荷にしかならない。良い加減俺を自由にしてくれ」
抑揚の無い冷淡な声。
感情の失せたその声音に、だからこそ拓海は涼介の積もった怒りを見たような気がした。
愛される。
そんな期待は最初からしていなかった。
けれど、自分が涼介を苦しめている。その事実に拓海の大きな瞳から涙が自然と零れる。
涼介はその涙を見て、大きな溜息を吐き出す。
「…それだ。君のその湿ったところが憂鬱なんだ。一度は確かに婚姻と言う形を取ったんだ。もう義理は果たした。君ももう十分だろう？」
十分？
十分ではない。
拓海はもっと…そうだ、もっと。
お、願いがあります…」
涙を手で拭い、震える声で言う。
何だ？」
お、れを……」
心臓が戦慄く。
胸が痛い。
俺を…抱いてください」
拓海は一度も、涼介から愛された記憶が無い。
だから最後に一度だけ、愛された事実が欲しかった。
精一杯の勇気を搾り出して放った願いは、けれど涼介の嘲笑に合った。
何だ、それは。馬鹿馬鹿しい！」
ヒビだらけだった拓海の心。
それに亀裂が走る。

男に飢えてるんだったら他を当たれ」
パラパラと砕けていく。
生憎と君などに手を出すほど、俺は不自由していない」
拓海は顔を上げられなかった。
心が壊れていく。
大切な宝物。
ずっと大事に雛のように暖めていたものは、孵化することなく手のひらの上で砕けていく。
まぁ、君がもう少し魅力的だったら考えないでもないが…君では無理だよ」
あざ笑う声に壊された。
俯いたまま身動きも出来ない拓海を置き去りに、涼介は再び立ち上がり部屋を出て行く。
すぐに出て行けと言っても君にも身支度もあるだろう。考える猶予を与えるよ。だが…覚えておいてくれ。俺は君がいる限りこの部屋には帰らない。じゃあな」
バタンと玄関の扉が閉まる音がする。
膝の上にパタパタと涙が零れ続けている。
壊れてしまった。
粉々に。
欠片を拾い集めるように、拓海は両手で顔を覆い泣きじゃくった。

バタンと、玄関の扉が開く音にもう期待はしない。
あれは涼介ではない。
彼だけは、させるはずが無い音。
おい、拓海。いるのか？」
予想通り部屋に入って来たのは啓介で、昨晩からずっとリビングに座りっぱなしの拓海を見つけ、驚きに目を見開く。
「…おい、お前…」
青褪めた顔と、泣きじゃくったと分かる酷い顔。
そしてテーブルの上に乗せられた薄い紙を見つけた瞬間、その顔が痛ましいものに変化する。
「これ…アニキが…？」
啓介が離婚届の涼介のサインを眺め、悔しそうに目を細める。
「…俺、のせいか…？」
固まったままだった拓海の身体が、ほんの少しだけ動く。
小さく首を横に振り、咽喉の奥に閊えたままだった声が掠れて出る。
「……け、すけさんの…じゃ、ありませ…」
「…俺、もう一回アニキのとこに行って来る！」
立ち上がり、激昂した姿勢で飛び出そうとする啓介を、けれど拓海の叫び声が止めた。
「いんです！！」
「いって…でも、お前…」
「…いいんです。もう…」
啓介を留めようと、立ち上がろうとした拓海の身体が揺らめく。

それを啓介は慌てて戻り支えた。
最初から…俺の我侭だったんだ…涼介さんをそれに付き合わせて…迷惑かけて……だからもういいんだ」
「いって…でも、お前…好きなんだろ？アニキのこと！」
ドン、と啓介の胸に衝撃が起こる。
それが、拓海の拳が打ったものだと気付いたのは、いつも儚げに微笑む拓海の、感情を顕にした表情を見た時だった。
「、仕方ないじゃないか！嫌われてるんだよ？！」
拓海……」
いつもいつも。
小さな幸せを胸に抱いて、不平も不満も言わず、微笑んでいた姿はどこにもなく、剥きだしの十八の少女の姿がそこにあった。
わ、笑ってた…馬鹿馬鹿しいって…俺じゃ無理だって…」
啓介は居た堪れず、震える細い身体を抱きしめた。
拓海の手のひらが啓介のシャツの胸を掴む。強い力で。
俺、が…もっと綺麗だったら…涼介さん、少しは相手にしてくれたのかな…俺みたいな…みっともなくて、男みたいの…そりゃ迷惑だよな…」
拓海…」
慰める言葉が出て来ず、啓介はひたすら拓海を抱きしめる。
俺は……」
そして啓介は気付く。
拓海の身体の震えが止まっていることに。
俺はただ…」
おい、拓海？！」
名を呼んで欲しかった。
昔一度きり。
遊んでもらったあの時のように。
優しい笑顔で、拓海の名を。
俺はただ…最後に涼介さんに愛されたかったんだ…」
真っ暗になった視界に、死んだ母の泣き顔が見える。
彼女が亡くなる、一週間前の顔。
『ごめんね、ごめんね、拓海』
何度も拓海に謝る。
そのたびに拓海は首を横に振る。
『ごめんね。丈夫に生んであげられなくてごめんね』
大丈夫だよ。大丈夫。
だから泣かないで。
続いて父の顔が浮かぶ。
もう無理しなくて良いよと言う拓海の頭を、いつもの無表情のまま乱暴に撫でる。
『心配すんな。お前は絶対に俺が助ける』
お金が足りなくて、朝から晩まで、寝る間も惜しんで働いていた。
もう自分のために無理して欲しくなくて、そう言ったのに、滅多に魅せない笑顔を浮かべて父は言ったのだ。
『頼むから…お前ぐらい助けさせろよ。お前は俺とあいつの大事な宝

なんだからさ、別にこんなの苦でもねえよ』
働いて。働いて。
一瞬の気の緩みが事故に繋がった。
ごめんなさい、お母さん。
ごめんなさい、お父さん。
何度もそう言いたかった。
でもそう言うと、二人とも哀しそうな顔をするから言えなかった。
丈夫に生まれてあげれなくてごめんなさい。
無理させてごめんなさい。
そして。
ごめんなさい、涼介さん。
我慢をさせて…我侭言って…。
おい、拓海！！
もう声が聞こえない。
拓海は真っ暗な闇に包まれた。

女の子なのに自分の事を「俺」と呼ぶ変わった子だった。
君は女の子なんだから、私、って言うんだよ？」
そう教えると、小さな少女は不思議そうに首を傾げ、自分の事を
私…」と呼び、けれどすぐに唇を尖らせた。
「…なんかへん」
そのふてくされた様子に、ひねくれた子供だと自覚のあった涼介が、
素直に声を上げて笑った。
だって、おれのまわりみんな『おれ』っていうもん。おれだけわたしだとへんだもん」
笑われたのだと、勘違いした少女が涼介に必死に言い訳をする。
その様にもまた笑いがこみ上げる。
涼介は少女の柔らかそうな髪を撫で、そして誰にも見せたことのない、優しい顔で微笑んだ。
そっか。じゃあ仕方ないね。君は君らしくあるのが一番だから」
意図した表情ではなかった。
少女の前だと、自然と優しい笑みが零れた。
そんな涼介の様子を見ていたからなのだろうか。
少女が帰った後に、母親が涼介に向かい言った。
涼介、あの子ともっと一緒にいたい？」
涼介は頷いた。
そうだね。あれだけ可愛いと楽しいよ。啓介とあの子を取り替えられたらいいのにな」
妹にってこと？」
「うん」
それは無理よ。あの子は藤原さんの家の子だから。でも、大人になってからなら家族になる方法があるのよ？」
悪戯っぽい母親の顔に、聡い涼介は呆れた視線を投げ返した。
結婚しろってこと？…気が早いな。あの子はまだ小学校一年なんだろ？大人になったら俺のことなんて忘れてるよ」

じゃあ、忘れてなかったら結婚する？」
どうあっても結婚させたいのか、と呆れながらも、頭の中であの少女が自分の傍で笑っている姿を想像する。
…嬉しかった。
単純に。
だから涼介は頷いた。
そうだね。もしもあの子が大きくなっても俺を好きでいてくれたなら」
春の、柔らかな陽射しのようなふんわりと暖かい少女。
それは涼介の心に、大事なものとして大切に仕舞われ…そして忘れた。
十二年後。
再び少女に会ったとき。
涼介にとって彼女の存在は「厄介なもの」、それでしかなかった。

嫌な夢を見た。
昔の、もう忘れていたはずの記憶。
チッ、と舌打ちをし、涼介は硬い簡易ベッドから身を起こす。
身体が強張り、首を少し動かしただけで関節がゴキゴキと音を立てて鳴った。
それにまた舌打ち。
家にも帰らず、連日病院に泊り込む涼介に、同僚の医師、看護師たちは「まるでここに住んでいるようだ」とからかう。
好きで住んでいるわけではないと言い返したいのを押さえ、愛想笑いで
都合が良いからね」
と真実と虚実を混ぜた言葉でごまかす。
こんな不便を強いられているのは、全てあの少女のせいだ。
三ケ月前。突然親に呼ばれ、行った先で再会した少女。
まだ二十歳にもならぬ少女を前に「結婚しろ」と言われた衝撃と不快さは例えようもない。
涼介は自身を自我が強くプライドの高い男だと自負している。
それは長所でもあり、短所でもあるところだが、親からの一方的な結婚命令は涼介のプライドを甚く刺激した。
自我を損なうような命令に、涼介は当然の如く反発し、怒りを覚えた。
そしてその怒りは、理不尽と知りながらも少女に向けられた。
茶番のような結婚。
どうせ二十歳前の少女など、すぐに自分に嫌気が差し逃げるだろうと思っていた。
けれど。
脳裏に、夢の中に出てきた幼い少女の顔と、今の少女の顔が重なる。
彼女は変わらなかった。
ずっと、変わらずに涼介に同じ顔を見せる。
そう言えば…」

涼介は思い出す。
最後に見た少女の顔は泣き顔だった。
自分がどんなに冷たくしても、困ったように微笑むだけだった少女が、あの時は泣いていた。
ズキリと、抑えていた涼介の良心が痛む。
可哀想なことをしている。その自覚はある。
だが、彼女だって――…。
高橋先生、起きてますか？」
コンコンと扉をノックする音に、思考が中断される。
涼介は頭を軽く振り、ベッドを降りてドアを開けた。
ああ。起きている」
ドアの向こうには見慣れた看護師の姿が見えた。
お客様がいらっしゃってますよ。弟さん」
「…ああ」
やはり来たか、そう感じた。
それにしても先生…また泊り込んだんですか？」
何も言っていないのに、後を付いて来る看護師に涼介は眉をひそめる。
家にお帰りになるのが嫌なら、私のところにいらっしゃればいいのに…」
途端、女の顔になった看護師に、涼介は冷たい一瞥を送る。
…そう言った付き合いは好まないと、そう言ったはずだが？」
涼介は心の中で舌打ちする。
失敗だった。
彼女と寝たのは一度だけ。
同じ病院内で手を出すのは控えていたのだが、どうしても感情が抑えきれず、手近にいた彼女に手を出した。
深い付き合いになるつもりはないと、そう念を押しながら。
涼介は看護師の伸ばしてくる手を振り払い、早足で廊下を歩く。
『抱いてください』
あの日。
らしくなく少女はそう言った。
涼介はそんな少女を笑い、そして冷たく突き放した。
そして見せた涙。
あの瞬間、芽生えた感情。
怒りのような、苛立ちが涼介の中で暴れた。
それを後悔なのだと認めたくなくて、涼介は足掻き、禁を犯し女に手を出した。
いや、その前からだ。
あの少女がいるようになってから、涼介は苛立つことが多い。
胸を、掻き毟りたいような衝動に陥る。
そんな自分が許せず、涼介の怒りは少女に向けられ、どんどん少女を悲しませる。
腹が立つ。
少女に振り回されている自分にも、少女を悲しませる自分にも。
涼介は気を取り直すように溜息を吐き、そして寝乱れた髪を掻き混ぜた。

馬鹿ばかしい」
吐き捨てるように呟く。
言った瞬間、少女に向け同じ言葉を言ったことも思い出す。
また苛立ちが募る。
けれど。
涼介は息を吸い込む。
待合室のロビーに、見慣れた弟の金色の髪が見えた。
「それももうすぐ終わる」
呟いた瞬間、ズキリと痛んだ胸を、涼介は無視した。

「よう、アニキ！」
良い意味でも、悪い意味でも啓介は人の注目を集める。
今も、声をかけられた瞬間、周囲の視線が涼介に集まった。
目立つのは話の性質上好ましくない。
涼介は前と同じように、啓介を視線だけで促し、外へと連れ出した。
そして人気の無い場所で足を止める。
何の用だ？」
無表情のまま問いかける涼介に、啓介が苦笑を浮かべる。
「分かってて聞いてんだろ？」
涼介は大仰に溜息を吐いた。
「またアレの事か……」
以前は大変だった。人の大勢いるロビーでいきなり怒鳴り込まれたのだ。
今回も、離婚届けを渡したことで拓海が啓介に泣きついたのだろう。
涼介は舌打ちをする。
泣きつくぐらいなら、それこそ最初から啓介と結婚すれば良かったんだ。
自分のような冷血漢ではなく、啓介のような、単純で短期だが、けれど優しい男と。
そうすればあの子は泣かなくて済んだのだ。
「ま、正解ってトコ」
明るい調子の啓介の声音に、涼介は違和感を覚え眉をひそめる。
てっきり、また怒って怒鳴りに来たのかと思ったのだが、どうも違うようだ。
啓介はポケットを探り、そして四角に畳まれた紙を取り出した。
「サァ…」と、涼介の血の気が引く。自覚無く。
「はい、コレ」
ガサガサと啓介の手が紙を開く。
あいつの署名は終わってるし、何なら証人の欄まで書いておこうか？」
涼介は差し出された紙を受け取った。
それは先日、涼介が拓海に突きつけたものだ。
「もう…書いたのか」
長引くと思っていたのだ。拓海のあの様子に。
まさかこんなに早いとは思っていなかった。

変なこと言うんだな、アニキ。急かしたのはアニキじゃねぇか」
啓介の笑顔がやけに癇に障った。
受け取った紙をただじっと見つめる。
涼介の綺麗な楷書とは違う、少し丸みを帯びた崩れた字。こんな字を書くのか、と涼介は拓海のことを何も知らない事実を実感していた。
拓海から伝言。アリガトウゴザイマシタ、ってさ」
ありがとう。
そう礼を言うのか。あんな事をした涼介に。
迷惑かけてごめんなさい、我慢させてごめんなさい、我侭言ってごめんなさい。おまけに俺にまでゴメンナサイゴメンナサイ…」
啓介の笑顔が消える。
そして涼介の頬に衝撃が走った。
ゆらりと身体がよろけ、地面の上に膝を着く。
殴られたのだと気付いたのは見下ろす啓介の姿によってだった。
あいつもバカだけどさ。アニキが一番のバカだぜ」
涼介は殴られた頬に指を当て、傷の具合を確かめる。
手加減無しに殴られたそこは、奥歯がぐらつき口の中に血の味が広がっている。
ゆっくりと立ち上がり、膝の汚れを払う。
心外だな。あいつが馬鹿なのは俺も思うところだが、俺までそう言われる覚えは無い」
フン、と啓介が鼻で笑う。
あいつならそうやって騙されてくれただろうけど、俺はごまかされねぇよ」
「…何を」
アニキはあいつに嵌るのが恐いんだ」
「……何？」
嵌って、自分がグズグズになるのが恐くて、あいつを邪険にしてたんだろ？」
涼介は声を上げて笑った。
馬鹿なことを！」
啓介がそんな涼介に舌打ちする。
またそうやってごまかす…」
けれどすぐに声のトーンを落とし、視線を外す。
ま、もうどうでも良いけどな。どうせあいつはアニキのとこには戻らねぇんだし」
啓介の言葉に、スゥと涼介の激昂しかかっていた心が一気に沈む。
それで？今はお前のものか？」
露悪的に、嘲笑を浮かべ啓介に言えば、啓介は遠い視線のまま痛いような表情をした。
あいつは誰のものにもならない」
啓介が唇を噛む。ギリリと音がするほどに、強く。
俺には最初から手を伸ばす権利も無かったし、アニキの手ももう届かねぇ」
涼介には啓介の言葉の意味が分からない。
けれど長年見てきた弟が、いい加減な気持ちで戯言を言っているので

はないことぐらい分かる。
意味が分からないながらも、不安が募る。
後悔するぜ、アニキ。…いや、もう後悔してんのか」
啓介の視線が再び涼介に戻る。その眦に涙が浮かんでいるのを涼介は見た。
「……啓介？」
けれどすぐに啓介の顔が明るいものに変わる。
いつもの彼の如く、明るく元気なものへと。
ま、とりあえず俺は渡したから。後はアニキの方でそいつを出しといてくれよ。そんじゃな！」
片手を挙げ、笑顔を浮かべ、けれどすぐさま背中を向けて、早足で立ち去る。
『あいつは誰のものにもならない』
啓介の言葉が涼介の脳裏を巡る。
『後悔するぜ、アニキ』
その言葉がやけに胸に重く響いた。

何日かぶりに自分の部屋へと戻る。
玄関の扉を開け、その無機質な空気にまず驚いた。
『お帰りなさい、涼介さん』
微笑む姿もなく、奥から漂う部屋の暖かさも、料理の匂いもしない。
誰もいない部屋に、涼介は気まずさを覚え「ただいま」と呟く。
もう返事を待つ人間も、返してくれる人もいないのに。
ガランとした何も無い部屋。
必要最低限の物しか置かれておらず、調度品の類も全て涼介の両親が用意したものだ。
事実を確認するように、涼介は拓海の部屋へと向かう。
誰もいない部屋。
何も無い部屋。
拓海が出て行ったから何も無いのではない。
最初からあの少女はこの部屋に何も持ち込まなかったのだ。
涼介は空になったクローゼットを扉を拳で叩く。
脳裏に浮かぶ少女の涙。
だが、と涼介は考える。
最初に、涼介との生活に拒否を示したのは、あの少女のはずだ。
確かに、乗り気ではない結婚ではあったが、正直どうしても嫌ならそもそも話を受け入れるはずがない。涼介はそういう男だ。
どこかで過去に感じたような、少女に対する淡い気持ちが残っていた。
涼介は最初に、
『愛さない』
と拓海に宣言した。
それはしかし、言い換えれば、「愛せない」わけではない。
あれは拓海に言いながら、自分に言い聞かせていた言葉でもあったのだ。

思えば、涼介もまた戸惑っていたのだろう。
自分の周りには存在しないような、純粋無垢な存在に。
穢すことを恐れ、簡単に触れることすら出来なかった。
清らかなものを守り慈しみたいと言う感情は、涼介にももちろんあるし、さらに言うなら、擦れて捻くれてしまったからこそ、それに対する憧憬は強い。
けれど、涼介は拓海の荷物を見てしまった。
この部屋に初めて二人で足を踏み入れた時、拓海が持ち込んだ荷物はスポーツバッグ一つだけだった。
中身は、両親の位牌と、僅かな衣類。
『荷物はそれだけなのか？』
そう問う涼介に、拓海は何でもないことのように『はい』と答えた。
『あまり必要ありませんから』
その言葉に涼介は怒りを覚えた。
乗り気ではなかった涼介でさえ、この部屋に移るのに小さなトラック一杯分の荷物を要したのだ。
拓海のその荷物の少なさを、涼介はこの結婚に対する意欲と見た。
つまりは、すぐに出て行けるように荷物が少ないのだろうと、そう判断したのだ。
それに気付いた瞬間、カッと灼熱のような怒りが湧いた。
目の前の少女に対し憎しみが湧き、過剰なまでの涼介の反発となって現れた。
そう今までの感情を振り返っていた涼介は、そこである事実に気付く。
馬鹿な…」
愛さない。そう自分に言い聞かせたこと。
不承不承ではあったが、結婚を承諾したこと。
そして拓海の荷物の少なさに、怒りを覚えたこと。
それは全て、あの少女に対する涼介の秘められた想いを如実にしている。
『歌って、自分がグズグズになるのが恐くて、あいつを邪険にしてたんだろ？』
それは正に啓介が言っていた通りの事実。
幼い頃。一度きり会っただけの少女。
可愛い子だと思った。
ずっと傍にいられたなら嬉しいのにと思った。
『涼介さん』
あの儚い笑顔で、自分の名を呼ばれると、感情がざわめいて落ち着かなかった。
苛立ちだと思っていた感情のざわめき。
それは全て……。
ドン、と涼介はもう一度拳で壁を叩く。
「……有り得ない…そんな馬鹿な…」
けれど、否定すればするほど、心の奥底が正解を導き出す。
邪険にした。
酷いことをした。

そして泣かせて…出て行った。
た、くみ…」
名を呼べば良かった。
優しくして、そしてもっと笑顔にさせたかった。
けれど遅すぎた。
ズルズルと膝の力が抜け、涼介は壁にもたれるように崩れ折れる。
賢しらな大人のプライドが、こんな単純なことを見落とし、涼介の目を曇らせた。
後悔、だって？」
啓介の顔が思い浮かぶ。涼介に向かい、放った言葉も。
ああ…してるよ。啓介。後悔なんてしたくなかったのにな…」
『抱いてください』
本当は分かっていた。
あの時、少女がいい加減な気持ちで言ったわけではないことを。
震える細い身体。必死な眼差し。
高慢とさえ言えるプライドが、彼女から差し出された最後の手を無残に拒絶した。
そしてそれだけではなく…らしくなく怯えたのだ。
彼女に手を出し、薄汚れた自分があの無垢な存在を穢すことを。
けれど、全てはもう遅い。
そして思う。
自分のような酷い男より、彼女にはもっと相応しい男がいる。
啓介のような、優しくて、大らかで、少女をちゃんと慈しめるような男が。
「……参ったな…」
ポトリと手のひらの上に落ちた雫で、涼介は自分が泣いていることに気付いた。
とっくに惚れていたのにな…」
十二年前のあの瞬間、既に。
なのに無視して、足掻いて、結局あの少女に残酷な仕打ちをしてしまった。
不意に、自分に対する猛烈な怒りに襲われ、自分で自分の頬を殴った。
「…いてぇな…」
ゴツンと頭が壁に当たり、啓介に殴られた箇所と合わさり痛みを増す。
けれど、きっと拓海はもっと痛かった。
痛かった、はずだ。
もう一度自分を殴ろうとして、涼介はそれに気付いた。
クローゼットの隅に、光る小さなもの。
何の気は無しに手を伸ばし、それを掴み見る。
カサリとした硬い紙の感触。
それが何であるのか、確認した途端、涼介は驚愕に目を見開いた。
それは、涼介がよく知っているものだった。
厳密に言うならば、それは涼介が「扱って」いるものだった。

最悪の予感が涼介の脳裏をよぎる。
涼介は手の中のものを握り締めた。
手の中のもの。
それは薬だった。
しかも一般に手に入るような類のものではない。
それがどういった用途のものなのか、涼介は嫌と言うほどよく知っている。
少なかった荷物。
それが意味することの本当の理由を涼介は今直感した。
そうだ。
最初から疑わなければならなかったのだ。
突然の押し付けられた結婚。
涼介の性格を良く知る両親が、そんな無理を通そうとした事実。
その裏を。
急ぎ、部屋を去り両親の元へと向かった。
実家が病院を経営しており、真っ直ぐに涼介は院長室の扉を開けた。
好都合なことに二人揃っている。
髪や服を乱し、慌しく駆けつけた息子を、両親は冷静な表情で出迎えた。
遅かったな、涼介」
父の言葉に涼介は怒りを覚える。
「どう言う意味ですか」
「言葉の通りよ。もっと早くに来ると思ってたの。それだけ」
母の、呆れたような言葉に、また怒りが湧く。
机に上に、空になった薬の包装紙を叩きつけるように置く。
これは……どう言うことですか?!」
激昂する涼介とは対照的に、二人の態度は平静なままだ。
お前はそれをどう見る?」
試すような眼差しに、涼介の頭がスウッと冷える。
怒りは判断力を曇らせる。
それで、あの少女には失敗したのだ。
涼介は深く息を吸い込み、心を落ち着かせた。
難治性の……心不全などに処方されるものであると記憶しています」
言葉にして出すと、漠然とであった不安が現実に変わる。
ああ。正解だ」
つまり……」
ハァと息を吐き出す。
心臓の鼓動がやけに耳に響いた。
あの子は…重度の心臓病を患っているんですね」
ドクドクと、五月蝿いぐらいに唸っている。
しかし、その騒音が一瞬で消える。
そうよ」
母の淡々とした言葉。
それを聞いた瞬間に、鼓動は止まり、時間さえ止まったような感覚

に陥る。
持って二十歳。早急に手術が必要な状態だったの。でも…成功率は五割」
衝撃に目を見開き、口を開けたままの間の抜けた顔を晒す。
どうせ死ぬんなら、最後に小さい頃の夢を叶えたかったんですって」
ゆ、め……」
見えない鉤爪で自身の胸を引き裂く。
切り裂き、血を流し、激しい痛みが涼介を襲う。
ずっと好きだったお兄ちゃんと結婚したい。そう言ったのよ?最後に一つだけ我侭が叶うなら、って。いじらしいでしょう?」
だったら…」
涼介はドンと拳で机を叩いた。
だったらそう…最初から言ってくれれば!」
そうだ。
最初からそうと知っていたのなら…。
拓海くんの希望だ。お前には絶対に教えるなと」
なぜ?!
その意思を込め、父を見れば冷静な声音とは裏腹に唇を噛み締める姿があった。
お前が…涼介は優しいから、知ればきっと同情するだろうから、と。お前にだけは、可哀想だと、そう思われたくなかったと…そう言ったんだ」
愕然とした。
確かに、最初から知っていたなら、涼介は同情し優しくしただろう。
けれど己をよく分かっている。
その優しさは、自分の受け持つ患者に対するものと、同等の優しさになるだろう。
こんなにも、胸を焦がす感情には成り得ない。
つまりは、拓海が求めていたのは偽りの優しさではなく、本物の優しさ。
けれど涼介はそんな拓海に、本物の冷たさで返した。
お、れは…何てことを…」
自己嫌悪で押し潰されそうだ。
馬鹿よ。本当に馬鹿!」
母が、堪えきれずに涙声で涼介を詰る。
小さい頃から可愛げのない子だと評されはしたが、賢い子、優秀だと誉めそやされてきた涼介にとって、その評価は初めてのことだった。
けれど、今はそれに反論する気は無い。
あなた、拓海さんに離婚届を渡したんですって?」
そうだ。書けと命じ、彼女は書いた。
それが馬鹿だって言うの。結婚もしてないのに、離婚なんて出来るはずもないでしょう?!」
結婚、してない?」
どういう事だ?
確かに涼介は婚姻届にサインをした。
両親の立会いの元で。

そしてその届けは母が提出すると預かり…。
「…出してなかったんですか？」
ええ。そうよ。拓海さんがね、どうせすぐに涼介とはお別れすることになるから、あなたの戸籍を穢したくないって」
「じゃあ……」
婚姻届は、拓海さんが持ってるわよ。大事に。お守り代わりに持っているんですって」
ああ。
聞きたいのはそう言うことじゃない。
自分の愚かさなど、再確認したいわけではないのだ。
彼女が、いかに健気に涼介を想っていてくれたかと言う事実も、今はもう必要ない。
今、涼介が知りたいこと。
それは…。
「…あの子は…彼女は……」
ゴクリと溜まった唾を飲み込む。
「…拓海は…今どこにいるんですか？！」
もう遅すぎたのだろうか。
涼介は己を憎んだ。
その憎しみは、涼介のプライドを砕く。
今更！教えると想ってるの？！」
母の詰りに、涼介は素直に膝を着き、そして頭を床に擦り付けた。
お願いします！」
両親の驚愕した気配が頭を下げた涼介に伝わった。
教えて下さい！」
生まれて初めての土下座だった。
かつて、高飛車に拓海に対し冷たい仕打ちをした涼介が、死んだ瞬間でもあった。

目を開けて。
ベッドの上から頬を抓って、痛みを感じることで拓海はやっと安心できる。
「…良かった…今日も生きてた」
眠る前が一番心配。
もうこのまま目覚めることがないのではないか。
そう不安で。
母が亡くなった後それが一番顕著に現れ、眠ることが恐くて頑として目を開けたままの時があった。
そんな拓海に、父である文太は呆れた顔で、「とっとと寝ろ」と叱った。
けれど拓海が
『だって寝たまま起きれなくなったら恐いもん』
そう言うと、文太はほんの少しだけ顔を歪め、また拓海を叱った。
『恐くなんてねえだろ。お前は起きたいと想ってんだろ？』

『うん』
『だったら起きる。起きたいか起きれないか、それを決めるのは結局…』
文太が自分の胸を拳でトンと叩いた。
『…ここなんだよ。絶対に起きてやる。そう信じて寝れば朝になりゃぁ自然と起きてるよ』
幼い頃に父親から言われたあの言葉。
拓海はそれは本当だなと実感する。
ずっと、起きていたい。…いや、生きたいと願っていた。
けれど、最近ではそれが薄れている。
正直に言うなら、涼介と一緒に暮らし始めてから。
彼に邪険にされるたびに、その意思は薄れ、最後になってしまったあの日。とうとう拓海はずっと自分に禁じていた「死にたい」と言う感情を抱いてしまった。
母が、父が大事に守ってくれた「自分」。そんな事を思ってはいけないと頭では分かっているはずなのに、感情が暴走した。
意識が途絶え、再び目覚めた時、拓海の時間は三日が過ぎていた。
コンコンと病室をノックする音が聞こえる。
スッと引き戸式の扉が音も無く開けられ、そこに見慣れた主治医の姿があった。
「城島先生」
「藤原君。具合はどうかな？」
父親と年齢の変わらないこの先生とは、高橋夫妻の紹介でお世話になることになった。
高名な心臓外科医で、父がこの医師の手術を受けさせたくて無理をしていたのだと、高橋夫妻は言った。
「大丈夫です。もうすっかり」
起き上がろうとする拓海を、けれど城島は手で制する。
「ああ、無理してはいけないよ。一時期、君は意識不明の状態だったんだからね」
「…はい」
ショボンと項垂れ、拓海はまたベッドに潜り込む。
「そうそう。ちゃんと言いつけは守ってね。分かってる？」
「走ったり運動しない」
「もう一つは？」
「……興奮しない」
「そう、その通りだ。大人しくしてるんだよ」
激しい運動をしない。
興奮しない。
それは拓海にとって小さい頃から身に付けさせられたもの。
自分を守るために。
けれどあの時は…。
暫く熱を測ったり、脈を取ったりと拓海の体調をチェックしていた城島は、それが終わるとファイルを閉じ椅子に座った。
それで拓海は、城島が大切な話をしようとしている事実に気付く。
ずっと待っていた知らせ。

君の手術日が決まったよ」
ドクンと、心臓が一瞬鼓動を早めたが、けれどまたすぐに平常に戻った。
そうですか」
成功率は五割だと言った。
城島は隠さず教えてくれる。
それが拓海とって、死刑宣告に等しいものだとしても。
もう…思い残すことは無い？」
本来なら、手術はもっと早くに行われていた。
けれど。
拓海が我侭を言ったのだ。
もしも失敗したら。
それが恐くて、我侭を言った。
『夢、叶えてきていいですか？』
と、そう。
城島は頷き、そして高橋夫妻は元より、啓介も…何より涼介に迷惑をかけてしまった。
拓海は一瞬迷い、確かに頷いた。
はい」
閉じた瞼に涼介の姿が浮かぶ。
しかし目を開けると、その姿は無い。
はい。無いです。大丈夫です」
夢は叶った。
だからもう良いのだ。
それ以上を望んではいけない。
城島は拓海の返事を聞き、小さく頷き手術日を告げた。
今から一週間後。
早いな、とほんの少しだけ思う。
城島が去り、一人になった病室で拓海は胸に下げたお守り袋を取り出した。
袋の口を開ければ、中には一枚の紙。
涼介と拓海の捺印がされたそれは提出されなかった婚姻届。
拓海の大事な、涼介と一緒にいられた証のようなもの。
それを胸に抱き、拓海は目を閉じた。
涼介さん…」
彼の名を呟き。
満開の桜。
一斉に咲き誇った花々が、強い風に吹かれ、花びらを散らせ消えていく。
その花の儚さが嫌いだった。
だから、花見に連れて行ってもらった母の手を振り払い、叫んだ。
『こんな花、嫌い！』
けれど母は桜と同じ、儚い笑みを浮かべ微笑んだ。
『そう？けれどお母さんは好きよ。だって綺麗だもの』

『きれい…だけどきらい。だっていなくなっちゃうもん！』
すると母は拓海の頭を撫で、そしてほんの少し翳った笑みを見せる。
『大丈夫よ、拓海。ほらね、この大きな幹の部分は残ってるもの。だから今はいなくなっても、また来年、同じように綺麗な花が咲くのよ』
そう言った母に、納得しないままに頷いた。悲しませたくなくて。
だけど今でも桜は嫌いだ。
拓海は病院の庭の、花の消えた幹に触れる。
母は幹が残っているから来年も同じ花が咲く。
そう言ったが、あれからほんの少しだけ大きくなった拓海は、桜の寿命が意外と短いものであることを知る。
十年でやっと若木。そんな木々に比べて、代表種であるソメイヨシノの寿命は五、六十年しか無い。
他の木たちと比べ、僅かな寿命と言ってもいいだろう。
そうだ。まるで自分と同じ。だから嫌いだ。
手術まであと三日を切っている。
城島は絶対に成功させると約束してくれたが、物事に絶対は無い。
難しいものだということは、昔から嫌というほど教えられている。
あと三日。
拓海の命の期限はあと三日しかないのだ。
なぁにやってんだお前？」
ぼんやりと、花の無い桜を見上げる拓海に、背後から声がかけられる。
振り返ると寒い季節に眩しいくらいの明るい髪の毛が見えた。
啓介さん」
思えば、彼ともあの日以来だ。
いきなり意識を失った自分に、きっと驚いたことだろう。
元気そうじゃん」
ニッと彼らしい顔で鮮やかに笑い、拓海に小さな花束を渡す。
「…何ですか、これ？」
見舞いに花束はツキモンだろ？」
ほれ、と無造作に渡す仕草に、拓海は笑みが零れる。
啓介さん」
あ？」
あの時は…迷惑かけてすみませんでした」
花束はピンクと白の淡いもの。
どんな顔をしてこれを頼んだのだろうか？きっと『テキトーに』だ、啓介なら。
ああ。びっくりしたぜ。お前、急に気ィ失うしさ、おまけに息も、脈も弱えし…焦ったよ」
「…すみません」
慌ててオヤジに電話して…お前の病気の話聞いたときが一番びっくりしたけどな」
ザァと強い風が吹いて、落ち葉が足元を通り抜けていく。
見上げた啓介の表情が、痛みを堪えたものになっている。
「……手術…するんだって？」
はい。三日後に」

明るく笑って欲しいな。
じゃないと、恐くなってくる。
難しいんだろ？」
†：はい」
いつも明るいこの人が、こんなにも沈んでいると、自分の現実がどれだけのものか、知らされているようで恐くなる。
けれど拓海のそんな不安は杞憂だった。
俯いた啓介の顔が、再び持ち上がった時、明るいものに変わっている。
ま、そんな事はどうでもいいんだ。俺はよ。頑張れって言ってやるしか出来ねぇし、それにお前なら言わなくても頑張るだろ？アニキのあんなイジメにも耐えてたんだからさ」
明るく笑う。
何でもないことのように。
「いじめって…」
拓海も笑いながら、そうか、あれはやっぱりいじめだったんだと再確認する。
そして改めて、嫌われていたんだなとも。
まぁ、アレだ。そんな頑張ってるお前に、俺からまだまだ頑張れる事をはなむけに教えてやる」
ふんぞり返り、腕を組み、ニッと悪戯っぽい笑みを浮かべ。
啓介は言った。
男ってのはな。好きな子はいじめるもんなんだ」
†…は？」
優しくしてやりてぇのにさ、いじめて、つい泣かしちまうもんなんだよ。それなのに好かれたいって思ってんだぜ？図々しいよな」
あの…啓介さん？何言って…」
何って…アニキの話だよ」
†…え？」
頭が上手く働かない。
俺はアニキが誰かに冷たくするのを初めて見た」
それは俺が…嫌いだったから…」
違えよ、バカ」
啓介が笑う。暗さの欠片も無い顔で。
拓海の不安を吹き飛ばすくらいの勢いで。
とても楽しそうに、兄の事を語る。
嫌いだったらアニキならとっくに排除してるよ。つーか、そもそも結婚なんざ同意もしねぇだろ？気に入らない程度のやつなら、逆にそつなく付き合ってやり過ごしてる。けど…お前にだけ感情剥きだしだった。らしくなくな」
そ、んな事は…」
上手く感情コントロールできねぇからあんなにイライラしてたんだろ？俺が少し突ついただけで、ビシバシ嫉妬してんのに、そのくせ本人に自覚がねぇからこっちとしてはおかしいったら無かったぜ」
言葉の通りに、ワハハと声を上げて笑う。
意味が…」
優しい啓介。

意味が…分かりません…」
こうやって拓海を励ましてくれる。
本当に、彼を好きになれたなら幸せだったろうに。
けれど拓海は選んでしまった。
「…ありがと…ございます」
涙目で、けれど笑顔で礼を言うと、啓介は不満そうに唇を尖らせた。
お前、信じてねえな。…ま、仕方ないと思うけどさ」
そして拓海の身体を引き寄せ、ぎゅっと抱きしめる。
けど、すぐに分かる。すぐに分かるさ…」
優しい声だった。
不思議に思い、抱きしめられた状態で上を見上げれば、優しい笑みの彼がいた。
あのさ」
「…え？」
お前に、プロポーズしただろ、俺。あれ、同情なんかじゃなくマジだったから」
あ、の…」
だからさ」
啓介の顔が近付き、唇が迫ってくる。
押しのけようにも、頑強な腕は強く拒めない。
ギュッと目を閉じ、拓海は覚悟した。
けれど、唇は寸前で拓海の唇を横切り、頬に触れるだけのキスを落とす。
驚き目を開ければ、そこには悪戯っぽい笑顔で笑う啓介がいた。
俺からのアニキへの最初で最後の意地悪」
身体を離され、そして背中を押すように、ぽんと軽く叩かれた。
じゃあな。幸せになれよ」
「…啓介さん？」
不思議な啓介の行動と言葉。
その意味を、間もなく拓海は理解することとなる。

啓介の唇が触れた頬を手でゴシゴシと擦る。
びっくりした。
本当にキスをされるのかと怯えた。
拓海は未だにキスも未経験だ。
子供っぽい夢かも知れないが、最初のキスは大好きな人としたかった。
「…って、言っても…もう叶わないか…」
だったら啓介にしてもらえば良かったかも。
そう思い、けれどすぐに否定する。
やっぱり好きな人としたい。
自分に嘘は付きたくない。
たとえ叶えられなくても。
病棟内に戻り、廊下を歩いていると、顔なじみになった看護師さんが笑顔で挨拶をしてくれる。

拓海もまた、はにかんだ笑顔で挨拶を返す。
藤原さん。カッコいいお客さんが待ってるわよ。いいわね～彼氏？」
あれ？もしかして啓介が先に病室に来ていたのだろうか？
違いますよ。彼氏なんていませんから」
あら。でもモテるでしょうに」
まさか！全然モテないですよ！」
必死に否定するのだが、彼女は全く信用せず、またまた、嘘ばっかり」と笑いながら、
あんまり彼氏待たせちゃダメよ。早く行ってあげてね」
その言葉に拓海は曖昧に頷く。
もう外で会ったんだけど。
そう思いながら、病室の扉を開く。
確かに、病室には訪問客がいた。
その人物が、扉が開く音と共に立ち上がり、拓海を振り返る。
それが誰か。
確認した途端、拓海は凍りついたように立ち尽くす。
「…りょ…す、さ…」
咽喉も、張り付いたようにくぐもり声が出ない。
涼介の表情は、拓海の記憶と同じ、凍て付いたものだった。
その冷たい眼差しに晒され、拓海の弱っている心臓がさらに縮み上がる。
咄嗟に、踵を返し逃げようとしたのだが、足が震えて動かない。
頭は冷たい氷を飲み込んだように冷え、顔は強張り引きつっている。
どうして涼介がここにいるのか？
なぜ？
涼介が恐い顔のまま拓海に近付いてくる。
拓海の膝がガクガクと震え、立っていられず崩れ落ちる。
「拓海！」
床にそのまま倒れる。その瞬間、涼介が俊敏に動き、拓海の身体を抱き留める。
ふわ、と鼻腔に懐かしい彼の香り。
その香りに拓海の目に涙が浮かぶ。
「ご、ごめ…ごめ…なさ…」
ガタガタと体が震える。
拓海は怯えていた。
好きな人に、これ以上嫌われるのは嫌だ。
だから、会いたかったけれど会いたくなかった。
会わずに。知らずにいたなら夢を見ることが出来る。
たとえ儚い夢だとしても。
けれど。
「…怯えるな」
ふわ、と身体が浮き上がり、拓海は自分が涼介に横抱きに抱えられている自分に気付く。
お前に…怯えられても仕方が無いことをしたと思う。だが…頼むから怯えないでくれ」
抱えられ、ベッドの上に優しく降ろされる。

驚き、涼介を見れば、先ほどまでの冷たい表情が消え、その顔には痛みを堪える悲痛なものになっていた。
†‥病気のことを聞いた」
その言葉に、拓海は理解する。
涼介は優しい人だから。
きっと拓海を切り捨てたことに罪悪感を覚えたのだろうと。
だから拓海はわざと明るい表情で、明るい声で言った。
気にしないでください。俺は大丈夫ですから」
涼介の眉が潜められた。
けれど拓海は気にしない。涼介には…いや、涼介にだけは同情されたくない。
好きな人に同情で優しくされる。
それは優しい哀しさだ。
手術すれば治るんですよ。もうすぐ手術なんです」
哀しくて、哀しくて辛くなる。
有名な先生が手術してくれるんです。俺、すぐに元気になるんです」
虚勢を張り、元気を装う。
だから、ありがとうございます。俺は大丈夫ですから」
けれど、そんな空元気は長く続かない。
拓海」
厳しい声だった。
あんなに、その声で名前を呼ばれることを願っていた。
しかしやっと呼んでもらえた名は、厳しい断罪の響きを持っている。
俺が聞きたいのはそんな事じゃない」
また目が潤む。
どうして涼介はこうなのか。
一生懸命頑張っているのに、いつも拓海の頑張りをあざ笑うように切り捨てていく。
酷い人だ。
酷すぎる。
だけど…好きだ。
悔しくて、ポロリと眦から涙が零れ落ちた。
その涙に、涼介はハッとしたように表情を和らげ、そして涙が伝い落ちる頬を指で拭った。
†‥俺はどうしてこうなんだろう?」
それは拓海が初めて聞く自嘲あふれる涼介の声音だった。
優しくしたいのに、いつもお前を泣かせるばかりだ」
瞬きを繰り返し、涼介を見つめる。
ポロリ、ポロリと瞬きのたびに落ちる涙を、涼介の指が消していく。
酷い男だよな」
声が出ない。
何だろう。
涼介のその表情に、拓海の胸がいっぱいになっている。
「もう嫌になったか?」
無言のまま、首を横に振る。

俺は……遅すぎたのかな…」
意味が分からず、涼介の顔をじっと見つめる。
いつも、拓海を冷たく見つめていた眼差しが、今は柔らかく、そして哀しそうに眇められている。
もう…啓介の方がいいか」
え…？」
どうしてここで啓介が出てくるのか、全く分からない。
頬を撫でる涼介の指が、拓海の唇に触れる。
そして気付いた。
もしかして……。
あの…見てたんですか？」
涼介が頷く。
お前を待つ間、この窓から外を眺めていた」
言われ、視線を窓に移すと、さっきまで拓海がいた桜の木が見える。
しかし、ここからでは遠目で、詳細までは分からないだろう。
俺なんかより啓介の方が良いんだったら、そう言ってくれ。何も言わずに俺は帰るから」
何度も、涼介の指が拓海の唇をなぞる。
まるでそこに触れた何かの痕跡を拭うように。
拓海の胸に、暖かいものが広がる。
ドクドクと心臓は戦慄き出し、呼吸が苦しくなってくる。
まるで発作の前兆のような症状。
なのに。
こんなにも甘い。
違うって言ったら…」
え？」
違うって…啓介さんじゃなくって…涼介さんがいいって言ったら…どうするんですか？」
好きだ。
この人が好きだ。
何度傷付けられても、好きで仕方が無い。
嬉しいな、そう思う。
こんなに誰かを好きになれたこと。
最初に…最後に…この人を好きになれたことを。
拓海の言葉に、涼介はやっと安心したように強張りを消した柔らかい笑みを浮かべ、拓海の手を掴んだ。
あ、と思ったのは、指に何か違和感を覚えたからだ。
ふと、手元を見ると、白銀の色が煌いている。
指、輪……」
左手の薬指に、細くシンプルなプラチナの指輪が填められていた。
驚き、涼介を見れば、はにかんだ表情で、自分の左手を翳す。
そこには拓海に填められたものと同じデザインの指輪が填められていた。
どうするかって？」
そしてその手が拓海の手を取り、持ち上げ指輪にキスをする。
結婚を」

抱きしめられる。
申し込むんだ」
寄せられた頬。
吐息さえ感じられるほど間近になった顔。
唇が寄せられ、柔らかな感触が拓海を包む。
キスを、されている。
それに気付いたのは、驚き閉じることを忘れた目が、長すぎる涼介の睫を捉えた時だった。

唇が離れる。
温もりが消え、唇に感じていた熱が失せる。
拓海は戦慄く指で、自分の唇に触れた。
な…んで…」
瞬きを忘れたように、目の前の涼介を凝視する。
涼介は穏やかな表情をしていた。
瞳はどこまでも柔らかく、拓海を愛しいもののように見つめ、口元はうっすらと微笑んでいる。
結婚してくれないか」
拓海の動揺など気にせず、涼介は穏やかなまま言葉を発する。
な、に言って…」
拓海の瞳から涙が零れた。
混乱と、嬉しさと…けれど恐ろしさ。

もしもこれが夢ならば。
もしもこれが彼の同情からならば。
手に入る前は恐れることの無かったもの。
失う恐れに拓海は震えた。
言っておくが」
溢れる拓海の涙を、涼介の指が拭う。
けれど拭いきれず、涼介は苦笑を浮かべ、ベッドサイドに置いてあったタオルを手に取った。
同情や、罪悪感から言っているわけじゃない」
拓海はそのタオルを、涼介から受け取り自分で涙を拭く。
じゃ…だって…そんなのおかしい…」
しゃくりあげながら抗議する声は、掠れて聞き取りにくい。
けれど涼介は気にしていなかった。
いや、必要なかったと言っても良いだろう。
拓海が信じられない気持ち。
それを作り上げたのは全て涼介の罪なのだから。
謝って済むことではないと思っている。俺は…お前に酷いことをしたよな。ずっと、拓海は俺にちゃんと想いを寄せていてくれたのに、俺は…それをないがしろにして、踏みつけにするような真似をした。拓海が信じられないのは無理もない」
涼介の手が、タオルを掴む拓海の手を掴み、指を絡める。
けれど、これだけは紛れも無く真実だ。信じて欲しい。俺は…きっと、初めてお前に会ったあの日から、ずっとお前の事が好きだった」

え…？」
十二年前のあの日。たった一度きりだったが、一緒に遊んだよな」
拓海はコクリと頷く。
あの日。
拓海は一緒に遊んでくれたお兄ちゃんに恋をした。
胸がドキドキして、嬉しくて、ずっと一緒にいられたらいいなと夢を見た。
可愛い子だと思った。素直で、愛らしくて。自分の事を俺なんて呼ぶから、乱暴なのかと思ったら大人しくて、かと思うとすぐに拗ねたり。楽しかったよ。お前といると」
涼介の表情が、言葉通りに慈しんだものになる。
その眼差しが気恥ずかしくて、拓海は俯いた。
母さんに、お前との結婚を暗示されて、俺はあの時、もっとお前と一緒にいたいと思った。もしもお前と結婚できたなら…とても…そうだ。とても嬉しいと、そう感じたんだ」
握った手のひらを強く掴まれる。
だから、俺は言ったんだ。もしも拓海が…ずっと、大きくなっても俺のことを好きでいてくれたなら、結婚したいと。そう、確かに言ったんだ」
手を握り締めたまま、涼介が跪く。
そして拓海の膝に額を当て、懇願した。
「もしも」
涼介さん…」
「もしもまだ、俺の事を好きでいてくれるなら、頼むよ…」
涼介が顔を上げる。
いつもとは違う。下から見上げる視線。
俺と結婚してくれ」
酷い事をされたと思った。
冷たくされて。
嘲笑われて。
もしかすると、これもまた涼介の残酷な遊戯なのかも知れない。
拓海を信じさせ、突き落とすそんな。
だけど、それでももう良かった。
大好きな人から懇願されて、断れるほど拓海は強くない。
強くないのだ。
ポロポロと、涙が大きな瞳から留め止め無く溢れる。
「よ、すけさ…」
両腕を伸ばし、差し出すと、笑顔の彼がそれを受け止め、身体ごと抱きしめる。
そして耳元で拓海の名を呼ぶ。
「拓海」
ずっと、これが欲しかった。
ずっと欲しかったのだ。
たとえ束の間だとしても、もう拓海には離せない。
「っしょ…いたい…」
ああ」

涼介の背中に回した腕に力を込める。
ずっと…一緒に、いたいよ…」
涼介の腕もまた、力が篭る。
痛いくらいに拓海を抱きしめる。
ああ。俺もだ。一緒にいよう」
そして再び顔が寄せられ、唇が重なった。
今。
この瞬間に死ねたらいいのにな。
拓海は瞼を閉じ、涼介の与える熱を感受した。

細いな、と思う。
掴んだ手首。指も骨が浮き出て痩せている。
病気のせいだけではないのだろう。
それだけ涼介が苦しめた。
その償いは、一生をかけて購わなければならない。
けれど、それは涼介にとって望むところでもあるのだ。
涼介の腕に、背後からすっぽりと抱え込まれ、拓海は細い身体を震わせている。
恐い？」
耳に唇を寄せ、囁くように聞くと、一瞬ビクリと身体が跳ね、そしてためらうように頷いた。
「…死んじゃったらどうしよう」

プロポーズを受け入れてもらい、すぐに拓海がお守り代わりに大事にしていた婚姻届を提出した。
名実共に、今の拓海は涼介の妻であり、もう藤原ではなく高橋拓海だ。
そしてその幸せを実感する間もなく三日。
手術日当日の朝。
涼介は不安に震える拓海を抱きしめている。
死なないよ」
でも…城島先生むずかしい手術だって言ってたよ。成功率は五割って」
涼介は笑った。
技術的にはね」
きょとんとしたあどけなさの残る瞳と目が合う。
それに涼介は自信に満ちた笑みで答えた。
俺は医者だよ、拓海」
コクンと拓海が頷く。その素直な仕草が愛らしくて仕方が無い。
だから、患者が生き延びる理由を知っている。簡単な手術なのに、患者が死亡する例は少なくない。逆に、生存は不可能と思われる状況から助かった例もだ」
パチパチと、大きな瞳が瞬く。
奇跡を…信じるか？」
涼介の言葉に、拓海の唇が尖る。
「何だ。そんなこと」

ハハと声を上げ笑い、涼介は不満そうに尖った拓海の唇にキスを降らせる。
馬鹿にするなよ。奇跡と言っても、根拠のあるものだ」
根拠って？」
不安そうな面持ちから、一転ふてくされたものに変わった妻の表情に、涼介は笑みが堪えれない。
確かに、拓海の手術は難しい。成功率は五割でも低すぎると言う事は無いだろう。けれど、そのパーセンテージを上げるには、技術的な面の他にもう一つある」
もう一つ？」
手を滑らせ、拓海の胸へ。
生きようとする力」
涼介の手のひらの下で、拓海の心臓が確かに鼓動を刻んでいる。
規則正しく、どくん、ドクンと。
これを、もしも止めると言うのなら神を恨む。
そして絶対にさせない。
これは信念だ。
絶対に生きるんだ、そう念じる気持ちが最後は必要になる。だから、生きることを諦めずにな、拓海。俺が待ってるんだから」
涼介の言葉に、拓海が唇を引き結び、はっきりと頷いた。
はい」
あと、もう一つ」
これをするために、かなりの労力と、しがらみを必要としたが、仕方が無い。
この流れもまた運命なのだろう。
パーセンテージを上げるために、俺も努力する」
え？」
「こんにちは、高橋拓海君。今日から君の担当医師の一人になる高橋涼介です」
大きく見開かれた目。
その予想通りの反応に、涼介は微笑む。
「……え？」
今日の手術。城島医師の助手として俺も参加する」
本来、身内の手術には外されるのが常だが、今回涼介の熱意と、城島医師が涼介の参加により成功率が上がると判断し、特例として認められた。
そしてさらに、涼介はここで勤務する事が決まった。
順当に行けば、涼介は大きな組織の中で教授に昇ることが約束された身だった。
けれどそれを捨て、高名であるとは言え、地方の個人病院に移った。
城島からの申し出に、迷うことなく頷いたのは、いわば涼介にとって分かりやすい拓海への誓いの証だ。
一生、拓海の傍にいると言う。
拓海のために捧げるという、結婚の。
俺は絶対にお前を死なせない。もちろん城島さんもな。だから安心しろ」

涼介の言葉に、拓海の瞳が潤み、けれどしっかりと微笑んだ。
ありがとう…涼介さん…」
拓海の身体の力が抜け、涼介に身を任せた。
応える様に、涼介は腕の力を強める。
「ふふふ…」
「どうした？」
今日から俺の担当ってことは、涼介さん前の病院辞めたんだ」
何故かいきなり拓海は嬉しそうだ。
辞めて、拓海の傍にいる事が嬉しいのだろうか？
けれどその予想は違っていた。
だったらさ、前に付き合ってた人と完全に別れたって事だよね」
「……お前…」
呆れた。
そんな事で喜んでいたのか。
身奇麗でなかった過去の自分を呪うやら、未だどこか信じさせれなかった自分の不甲斐なさを悔いるやら。
あ、でも涼介さんのことだから、すぐにこの病院でも綺麗な人が寄ってきちゃうか…」
あのな、と苦笑し、けれどそんな拓海を愛している自分に気付く。
お前、俺が絶対に浮気すると思ってるだろ？」
だって…」
「ないよ、もう。こんな目が離せないものがここにあるんだ。他に目なんて向けてたら、誰に取られるか分かんねぇからな」
そうだ。自分よりも、この少女は危なっかしすぎる。
自覚は無いようだが、この病院内でも密かなファンが数多いるのはもう確認済だ。
同性の無邪気なものはまだ容認しても良いだろうが、恐ろしいのは異性の真剣な思いだ。
自分に向けられるような浅い感情とは違い、拓海に惚れる男の想いは深い。
魅了されてしまうのだ。このアンバランスで、けれど芯の強い少女の姿に。
俺なんか誰が取るって言うんですか」
ごまかされないですよ、とばかりに睨む拓海に、睨みたいのはこっちだと逆に睨み返す。
「るだろうが。啓介とか」
今も忘れない。
あの見えた光景。
桜の木の下で、二人抱き合い、キスをしていた姿を。
だから！あれは誤解だって！」
キスは頬にだったと言うが、どちらにしろ啓介が本気だったのは揺ぎ無い事実だ。
もう〜俺は涼介さんが初めてのキスの相手なのに…」
だがこれは初耳。
「…へぇ」
意地悪そうに笑えば、拓海が頬を真っ赤に染めてそっぽを向く。

「…そうですよ。俺は誰かさんと違って、好きな人とじゃなきゃ嫌だもん」
それに関しては反論できないな」
苦笑し、そして拓海をもう一度強く抱きしめる。
でもこれからは好きな人としかしないよ。絶対だ」
腕の中で、拓海の身体が和らぐ。
「…うん」
俺を…置いていくな。お前がいなくなったら、俺はまた他の女とするぞ?それでも良いのか?」
「……やだ」
ああ。そうだ。お前とさせろ。頼むから…俺のために生きろ」
「…うん」
お前が死んだら俺も死ぬ。嘘じゃないぞ」
「…うん」
言葉が尽きない。
何度も、同じ言葉を拓海に繰り返す。
拓海の肯定の返事を聞きたいために。
そんな涼介に、拓海が振り向き、ニコリと微笑んだ。
涼介さん」
涼介も微笑む。
何だ」
遠回りをした。
辛い思いをさせた。
けれどこれからは…。
ずっと…一緒にいようね」
涼介が今まで見た中で、一番の鮮やかな笑顔。
それに魅了されながら、涼介ははっきりと頷いた。
ああ。ずっと一緒にいよう」
幸せにする、ではない。
きっとこの少女は自分の力など必要ない。
幸せになる。
その意思が満ちている。
涼介もまた、拓海と同じ強さで頷いた。
ずっとこの遥か未来に訪れる…」
死さえも二人を邪魔させない。
「…死が二人を別つまで」
永遠を涼介は誓い、柔らかく微笑む唇にキスをした。

――完

いちご大福

見る限り城島と言う男は人間として魅力的な人物であると涼介は考えている。
医師としての高い技術力に加え、度量、そして柔軟な思考と、年齢を感じさせないアグレッシブさには同じ医師の端くれとして尊敬の域に値する。
けれどそんな城島の唯一の悪癖が、おやつ」だろう。
ドアを開けた瞬間に、甘ったるい匂いが広がり、涼介は「またか」と溜息を零した。
先生。医者の不養生って言葉をご存知ですか？」
城島は下戸である。
その代わりとでも言うように、病的な甘党だ。
コーヒー代わりにメロンソーダを飲んでいる姿に、涼介の眉かしかめられる。
「よくもまぁ、そんな砂糖と着色料で構成された物質を口にしようと思いますね」
メロンソーダを飲みながら、傍らにスナック菓子。
けれど城島はそんな涼介の抗議を意に介さず、涼介の顔を見るなりニコリと笑った。
高橋先生。君、恨まれてるよ」
唐突な話題。
涼介の片眉が吊り上がる。
まぁ、僕もそうなんだけどね。可愛いなぁと思って大事にしていた子が、君みたいな人に掻っ攫われてしまったと思うとね」
ニコニコ、笑顔なの言葉の内容は剣呑だ。
涼介は口元だけで笑みを浮かべる。
「…ああ。妻のことですか」
そしてわざとらしく、口元を手で覆い俯く。
そうはおっしゃられても…彼女とは十二年前から所謂許婚の仲でありましたし、それに何より僕も彼女も…お互いこれ以上無いくらいに相思相愛ですから。自然な流れと受け止めて諦めて貰うしかありませんね」
「…ほら、これだ。本当に煮ても焼いても食えない男だよ、君は。ナースたちは、まぁ、拓海君の相手が君と知って喜んではいるようだけどね。問題は……」
男、ですか？」
そう。あれは深いよ～。拓海君は天然だからね。ああいうのは一度嵌ると、なかなか諦められないもんだよ」
君も苦労する。
そう言いながら、楽しそうにスナック菓子をバクバクと食べている。
涼介は不適に微笑み、「でしょうね」と返した。
構いませんよ。誰が相手だろうと蹴落とすだけです。それより、お話はそれだけですか？」

涼介の質問に、城島は手の中のメロンソーダを一気に飲み干す。
そしてコップを置き、先ほどとはうって変わり、真剣な面持ちで涼介に対する。
「いや、これが本題。拓海君の術後の経過だ」
城島の机の上のパソコンの画面上に、データが表示されている。
涼介は示されたそれを眺め、頷いた。
良好ですね」
そう。手術は大成功。経過も順調。後は何をするだけだと思う？」
涼介はそこで、始めて素直な笑みを浮かべた。
退院ですね」
そう。退院は一週間後と考えている。了解かな、旦那さん」
一週間。その数字に涼介は眉をひそめる。
長いですね。僕の私見では明日退院でも十分でしょう？」
まぁ、普通に考えたらね。けど…君、普通じゃないでしょう？」
「…心外です」
城島はハァとこれ見よがしに溜息を吐いた。
言いたくはないけどね、君、あの子が退院したら真っ先にセックスするでしょう？」
「……夫婦ですから。しないとは言えません」
「かもあんな可愛い拓海君の傍にいながら、お預けの禁欲生活。それが彼女の退院と同時に解放されるとしたら、僕はね。彼女の体力がそこまで回復していないと考えているんだよ」
「……」
だから退院は一週間後。順当だと思うけど、どうかな？」
拓海は先生の患者ですから…先生の指示に従います」
そう、良かった」
そう言いながら城島が机の引き出しをガラリと開ける。
そこから取り出されたのは大福だ。
「しょっぱいものを食べたら、甘いものが食べたくなるよね」
先生」
何だい？」
俺は今しょっぱいものを食べたような心地ですよ」
ふぅん。それは良かったね」
バクリと、大福を一口。
その後に食べる甘いものが、余計に美味しく感じるよ」
これみたいに。
そう言い差し出した大福の中にはイチゴが入っていた。

花拓く

家事を終え、リビングに戻った拓海はソファではなくペタリと床に座った。
どうしても畳での生活が長い拓海はソファに座る習慣が馴染めず、床の上でないと落ち着かないのだ。
そんな拓海のために、冷たいフローリングの上に、寝転がっても大丈夫なように毛足の長い絨毯を涼介が買ってくれたのは先週のこと。
二人で家具屋で選び、あまりの高額に躊躇する拓海を押し切り、涼介が購入を決めた。
高級なものだけあって、手触りや肌触りは心地よく、今では拓海のお気に入りの感触にもなっている。
ただ、色を白にしたのは失敗かも知れないと、絨毯を撫でながら拓海は思った。
色を選んだのは拓海だ。
『この色にする？』
と聞かれ、思わず「白」と答えた。
涼介の愛車の色であり、白衣の色でもある白は涼介を連想させる。
だからそれを選んだのだが、実際に生活してみると、白と言う色は勇気がいるものだった。
どうしても生活していると汚れてくるし、染みが残りやすい。
そんなに器用ではない方の拓海は、どうしても飲み物を零したり、汚してしまう事が実はある。
その度にちゃんと汚れを落としてはいるのだが、いつかこのままだと消えない染みが出来そうだ。
やっぱり、白は難しいのだ。
…涼介と同じで。
拓海は切ない溜息を吐いた。

啓介が拓海の不調に気付いたのは、拓海が退院して二週間目の事だった。
退院後は明るく、元気そうだった拓海が、まるで花が萎れるようにどんどん元気が失せていく。
とうとう、笑顔が作り笑いになった時に、啓介はモグモグとお気に入りの拓海の食事を頬張りながら聞いてみた。
「ニキと何かあった？」
拓海の元気が失せる理由は腹立出しい事に涼介のことしかない。
案の定、拓海は啓介の言葉にビクリと身体を震わせ、しかしすぐに作り笑いを浮かべる。
「…何も無いですよ」
嘘の下手なヤツ。
そう思いながら、啓介は拓海に向かい箸で指差した。
俺の目は節穴じゃねえぞ。ちゃんと入籍してから上手くいってると思

ってたのに、言えよ、何が原因だ？」
「……別に…」
言いたいけれど言えない。
そんな拓海の態度に、啓介はピンと来た。
ははぁ…さてはアニキとの夜の事だな」
図星だったようで、拓海の顔どころから首筋まで真っ赤に染まる。
な…そ…！」
自分の予想が当たっていたことに、満足気にご飯を租借しながら、啓介は何度も頷く。
なるほどなぁ…。アニキもずっと禁欲してたし、箍が外れて絶倫になっちまう気持ちは良く分かるけど、お前も病み上がりなんだから、遠慮しないできっちり拒むところは拒んだ方がいいぜ？じゃないとまたぶっ倒れちまう事になりかねないしな」
ハハハと、わざと明るく笑いながら言った啓介だが、ふと見た拓海の表情に「オヤ？」と笑いを止める。
唇を噛み締め、悲しそうな、切なそうな顔。
それは二人が擦れ違っていたあの時、何度も啓介が見た拓海の表情だ。
拓海？」
「…拒む、どころか…」
小さな、悔しそうな呟き。
それに思わず、啓介は咄嗟に浮かんだ考えを口に出してしまった。
まさか…アニキとずっとシテねぇとか…？」
まさかなぁ…と思いながら発した言葉は、恐ろしい事に正解だったようで、ハッとしたように顔を上げた拓海の瞳が大きく見開き、そしてポロリと大きな涙の粒が浮かんで零れた。
う…く…」
そして本格的に泣き始める。
焦るどころではない。
不用意な発言で、また拓海を悲しませてしまった。
全くアニキは何してんだ、と恨みながらも、必死に啓介は拓海を宥める。
ほら！アニキも職場を変わったばかりだから忙しいんだよ。プレッシャーとかもあるだろうしさ。ストレスが溜まってたりすると、男ってちょっと使い物になんねー時もあるしさ。でも落ち着いたらあのアニキなんだから、またちゃんとスルようになるよ！」
けれど啓介の言葉に、拓海の涙はますます酷くなる。
ず、ずっとどころか…」
え？」
さ、最初から…無いもん…」
無い。
何が？
と、考え、すぐに理解する。
ア？マジで？！」
啓介の予想では、あんなに誰かに執着する兄を見るのは初めてだった。

だからきっと、やっと手に入れた今では、ゲスな話 ヤリマクリ」ぐらいの勢いだろうと思っていたのだ。
それが最近どころか、最初からシテいないとは如何に？
ヒックヒックとしゃくり上げながら、涙に潤んだ瞳で、
「…け、すけさん…おれ、そんな魅力ないかな…」
啓介を見上げる姿は、魅力がないどころか、かなりヤバい。
率直なオスの部分がムラムラと啓介を唆す。
それを必死に押し殺し、啓介は深呼吸をし自分を落ち着かせた。
「…や、お前、すっげイイと思うけど…」
つっーか、コイツ。俺が惚れてたって事を無視してないか？
もしも自分がもっと本能に忠実であったなら、今頃押し倒されていても文句は言えない状況だ。
それをしないのは、ひとえにどれだけ拓海が純粋に涼介だけを想っているのか、嫌と言うほど思い知らされているからだ。
ぢゃ…何で…涼介さん…」
啓介は誘惑と言う悪魔と戦いながら、必死に考えた。
涼介が手を出さない理由。
まず思いついたのは、拓海の病気だ。
しかし兄も拓海の主治医の一人。
病気の完治度がどれだけのものか把握しているだろうし、それは手を出さない理由にはならない。
そして次に思いついたのは、拓海が処女であるということ。
物慣れた相手ばかりとだった涼介が、処女を相手に戸惑って…と考え、また否定する。
あの兄だ。
処女ごときに戸惑うはずが無い。
むしろ処女を何人か切っていそうだと考え、これも却下。
そして一番有力なのは 大事すぎて手を出せない」と言うものだった。
けれどそれも、あの兄がこんな美味そうなものを前に、いつまでも我慢が出来るはずがない。
う～んと悩み、そして一つの仮定に出会った。
なぁ」
「……う、…はい」
もしかしてさ…お前…ビビらなかった？」
「……え？……あ…」
何か思い当たる様子に、啓介はやはりそうかと確信を強める。
「、ここに来て最初の夜に…あの…て、手がその…服の下に行ったときに…ちょっと…」
何か言った？」
「…ヤダ、って…押し退けて…」
オイオイオイ。
そ、そしたらゴメンって、涼介さん…それから…ずっと一緒の部屋でも寝てなくて…」
…ヤバい。
アニキが不憫に思えてきた。
アニキ、じゃどこで寝てたわけ？」

この部屋に客間は無い。しょっちゅう訪問する啓介を、泊まらせないために涼介が敢えて作らなかったのだ。
グスンと拓海が鼻を啜り、リビングのソファを指差す。
「ここ？」
コクンと拓海が頷く。
あと…夜勤だって…病院に泊り込んだり…」
失念していた。
この子は恋愛経験の無い、マッサラな処女なのだ。
男の理性や、機微など想像も付かないに違いない。
――アニキ、拓海に拒まれて、ビビってもう手が出せなくなっちゃったんだろうな…。
大事だからこそ、怖い。
無理を通して嫌われるのが。
そんな不憫な兄のために、啓介はぐっと歯を食い縛り、拓海に向け解決策を教えた。
あのな、拓海…」
言いながら、ほんの少しだけ啓介は自分も不憫に思えてきた。
何が悲しくて、惚れてた相手の性生活まで面倒見てやんなきゃなんねーんだ…。
けどその理不尽さは、拓海の安心したような「ありがとう」の笑顔と共に消えた。

家に帰りたくない。
そんな風に思うだなんて、一ヶ月前までは夢にも思わなかった。
拓海の回復を一日千秋の思いで待ち、やっと退院し、新たな生活のスタート。
涼介としては非常に気を使い。
非常に良い感じにムードを盛り上げ、さりげなく関係を進展させたつもりだった。
しかし手が服の下に潜り込んだ瞬間拒まれ、見た妻の顔には軽蔑の色があった。
――夫婦なのだから手を出すだろう？！
そう声高に言いたいが、あの清純無垢な眼差しの前では、自分が穢れているだけかと落ち込みもする。
「高橋君。煮詰まってるねえ」
相変わらずお菓子を主食にしている城島が、暗いオーラを放つ涼介を揶揄する。
「…放って置いて下さい」
と言ってもね、君、そんな陰気な顔をされると、患者さんが不安に思うじゃないか。今日は無理せず、ちゃんと家に帰って拓海くんに甘えなさい」
甘える…。
甘えられたらどんなに良いか！
ジロリと、思わず恨めしげに城島を睨むと、全てを悟っている男はハハと笑う息でドーナツの周りを覆うグラニュー糖を飛ばした。

忍耐だよ、忍耐。僕はね、拓海くんが幸せなら、君の幸せなんて結構どうでも良いんだよね」
「酷いことを言いますね」
でも、実際に彼女にずっと酷いことをしてきたのは君だろう？」
ぐ、と痛いところを突かれ口ごもる。
僕はどれだけ彼女が辛かったのか、あの子は心は見せないけど、身体的なデータからは図れるからね。それに比べたら今の苦難なんて、痒いくらいのものだろう？」
涼介は諦めの溜息を吐いた。
「分かりました。今日は帰ります」
帰りたくないわけではないのだ。
ただ……自分の理性に自信が無いだけで。
過去の自分がどれだけ彼女に残酷な仕打ちをしてきたのか。
涼介が一番良く分かっている。
だからもう拓海を泣かせたくないし、怯えさせたくも無い。
いや、何より…彼女に嫌われたくない。
脳内で本能と言う箱に頑丈な理性と言う鍵をかける。
ヨシ、と気合を入れ、涼介は帰宅した。

もちろん自宅の合鍵は持っているが、拓海が起きているような時間帯ならチャイムを鳴らす。
チャイムを押すと、インターフォンから「はい」と溺愛する妻の声が聞こえた。
それに、「俺」とだけ返すとすぐに扉が開き、涼介の今最大の悩みでもある妻が顔を出した。
「お帰りなさい、涼介さん。今日は早かったんですね」
その顔は涼介の早い帰宅を喜び、うっすら頬を赤らめ微笑んでいる。
…可愛い。
非常にだ。
そんな表情を見れば、やはり早く帰ってきて良かったと思いながら、涼介はその赤らんだ頬に「ただいま」のキスをした。
が。
「……」
キスをし離れようとした瞬間、言葉を失った。
「あの…涼介さん？」
ゴクリと唾を飲み込み、涼介は掠れた声でやっと言葉を発した。
「…拓海」
「はい？」
またゴホゴホと咳払い。
「そ、その服は……」
そう。拓海の服装はいつもと違っていた。
いつもの彼女の服装は、動きやすいシャツやトレーナー等に、デニムのジーンズ。
そっけないその服装は拓海らしくて涼介も気に入っていたものだったのだが、今の彼女はそれとは全く真逆のいわゆる十代の女子が着る服

装。
普通にしていてもウエスト部分が見えるトップス。下はデニムだが太もも部分が丸見えのミニ丈のスカート。さらに左太もも部分にスリットが入っており、その見えそうで見えないギリギリ感が男度心をくすぐるなんてものではない。
変、ですか？」
恥ずかしそうに、短いスカートの裾を引っ張りながら照れる拓海の姿は可愛いなどと言う言葉で表現できない。
キンキンと、心の中の本能を閉じ込めた鍵が緩む。
ぎ、どうしたんだ、それ？どこかに出かけたのか？」
自分で言っておきながら、その瞬間怒りに燃える。
他の男がこれを見たというのか。
この、姿を？
ゴワっと全身から炎が燃え上がる。
「え、緒美ちゃんが前にくれたんです。似合うからって」
確かに似合う。
似合うが…外出禁止だと涼介は心に誓う。
でも…ちょっといっぱいスースーして恥ずかしいんですけど…」
そう…だな。拓海はまだ免疫力が回復していないんだから、そんな服装は体温を奪われ風邪を引きやすくなる。出来たらもう着ない方がいいな」
もっともらしく、しかめっ面でそう言うと、目に見えて拓海が沈んだ表情に変わった。
そ…ですよね…」
瞬間、しまった！と、涼介は焦る。
けれどすぐに元来のポーカーフェイスで取り繕い、ニコリと微笑み拓海の唇にキスをする。
だが一番の理由は、そんな可愛い姿で歩いて欲しくないって事だ。そう言う格好は俺の前でだけだ。…な？」
そう甘く囁くと、拓海がパアっと笑顔になった。
うん！」
ギンギンと、また脳内の鍵が緩む。
鍵は厳重に。
涼介は玄関の施錠とともに脳内にも頑丈に施錠し直した。
ご飯、まだですよね」
ああ」
ネクタイを緩め、ソファに座ると、拓海がイソイソと食事をリビングに運んでくる。
俺もまだなんで、一緒に食べましょうね」
拓海は、キッチンでの食事よりもリビングでの食事を好む。
テレビを見ながら、床の上に直に座って食べるのがお気に入りらしい。
だから涼介も合わせてリビングで取るのは常になった。
とは言え、涼介もまた習慣と言うものは抜けず、拓海は絨毯の上で。
涼介はソファに座りながら食べるのが常だった。
「いただきます」
手を合わせ箸を持つ。

擦れ違いの日々のとき。
何度も食事を作ってくれていた拓海を無視していた。
あの頃の自分をあざ笑いたい。こんなにも美味しい物を食べずにいたなんて。
「美味い」
そう言うと、拓海はいつもホッと安堵の表情を浮かべる。
良かった。涼介さんの口に合って」
どうやら、拓海はあまり料理に自信は無いらしい。涼介にとってはどうして自信を持てないのか不思議なくらいだが、以前にそれを問うと、
『だって涼介さん美味しい料理を食べなれてそうだから』
と答えられた。
しかし、と涼介は暖かい味噌汁を飲みながら考える。
確かに、弟共々「プロ」の料理には慣れている。
だが逆に拓海のような、暖かい家庭の味には慣れていないだけに、とても美味しく感じるし、何より拓海の持つ雰囲気が、プロでは作れないプラスαの味わいを作り上げているのだろう。
ありがとう、拓海。
美味しい食事を作ってくれる拓海に感謝し、心の中で礼を告げながら彼女を見た途端、涼介は味噌汁を吹きそうになった。
豆腐よりも艶やかな白い太ももが、落ち着き無くクネクネと動いている。
その度に、スカートの奥の秘められた部分がチラチラと垣間見え、男心を擽るなどと言う生易しい表現では足りない。
本能に直球だ。
涼介の熱の篭った視線に気付いたのか、拓海がハッとして居住まいを正す。
秘められたゾーンが隠れる。
うごめいていた白い足が、キチンと正座され机の下に収納されてしまった。
「すみません。やっぱスカートだと落ち着かなくって…」
「や…」
欲望の第一の鍵が壊れた。
木っ端微塵だ。
美味しい食事が戦いのようになってくる。
必死に拓海から目を逸らそうとするのだが、一度知った蜜の味は何度でも味わいたいのが人間の性だ。
見える太もも。
チラリと覗くウエスト。
食事を食むその唇まで、艶かしく見え、涼介の欲望は獣となって暴れ出しそうだ。
ガツガツと食事を終え、「ごちそうさま」と手を合わせる。
「お風呂、入ってもいいかな」
「あ、はい。もう準備できてますから」
「それと…ちょっと調べ物があるらから拓海はもう先に寝ていていいよ」

「…え？」
じゃあ、片付け頼んでいいかな」
「…え、あ…はい」
いきなりショボンとした妻に、けれど気遣う余裕は涼介には無い。
禁欲の上に、目の前にごちそうがありながらのお預け状態。
それなりに定期的に本能を発散してきた涼介にとって、これほどの修行僧のような心地は初めての体験だ。
いつか、本当に獣になって彼女を襲いそうだ…。
涼介は早く自家発電すべく風呂場へ向かおうとしたのだが、ツンと引っ張るものがあった。
何かと振り返れば、ぐそを掻いた拓海だ。
「た、くみ…？」
俺…そんなダメですか？」
ダメとは何が？
「え？」
俺…そんな魅力…無い？」
言われている内容を察し、涼介は一気に頭に血が上る。
しかしこのまま襲い掛かりそうな勢いを、深い深呼吸で留める。
拓海の薄い肩に手を置き、宥めるように言った。
そんな事は無いよ。拓海は凄い魅力的だ。正直、今もしたいの我慢している」
パチパチと大きな瞳が瞬き、キョトンと首を傾げる。
じゃ…何で？」
何でも何も！
無邪気と言うのは罪だ。無垢も罪。
フゥゥと大きく息を吐き、涼介は歯軋りしながら問いかける。
「かし…拓海は最初の時に…その、拒んだだろう？だから、怖いんじゃないのかと思ってね。だから…焦らなくても良い。ゆっくりで良いんだ」
欺瞞だ。
俺は馬鹿か。焦ってるに決まってじゃないか。何でもいいから丸め込んで押し倒せ！
と、心の中で悪魔が叫ぶ。
そして何より恐ろしい、目の前の小悪魔。
「あ…！」
さも今気付いたとばかりに、拓海が目を見開く。
そして何かを思案していたかと思うと、いきなりトップスを脱ぎ出した。
涼介は焦った。
焦ったが…なぜか止められなかった。
本能が理性を凌駕し始めていたのだ。
上を脱ぎ、下着一枚になった拓海が涼介を見上げる。
「これ…」
指差したのは自分の胸。
そこに広がる大きな傷跡。手術の跡だ。
「こんな…大きな傷ある女の子でも嫌じゃないですか？」

涼介は唖然とした。
「…胸もちっちゃいし」
そして聞こえるか聞こえないか程度の小さな呟き。
拓海が…嫌がったのはもしかして…そんな事か？」
そんな事って！重要です！」
ガチン。ガチン。バキッ！
鍵は壊れた。何重にも掛けた鍵は跡形も無く。
馬鹿か！」
叫び、涼介は本能のままに拓海を絨毯の上に押し倒し、貪るようにキスをした。
お前のこの…」
指先で、手術跡をなぞる。
白く細い身体がビクビクと震える。
傷は俺が縫ったんだぞ？跡が残らないように、丁寧に縫ったんだが、それでもこれだけ残ってしまったのは俺のミスだ。すまない」
謝りながら、癒すように舌を這わせる。
それにだ。胸が小さいだの、大きいだの、それこそ瑣末なことだ。肝心なのは…」
顔を上げ、拓海を見下ろす。
「…お前だと言う事だ。拓海であるなら、俺は何でも良い」
涼介さん…」
白い腕が伸び、涼介の身体を抱き締め返す。
やっと…。

そう、やっとだ。
拓海…」
泣きそうだった。
やっと、拓海とデキる。
真っ白い絨毯の上で、涼介は無垢だった恋人を味わった。

昨日までは灰青のようだったオーラが、一気にピンクに変化している理由は、つまりはアレだろう、と城島は考えた。
何ですか、先生。アイスが溶けますよ」
忠告の通りに、アイスが溶けて指を伝い、机の上にポタリと落ちる。
ちなみにアイスは棒アイス。ガ〇ガリ君のリッチミルク味。
真っ白な液が零れ落ちる様を見て、ピンクオーラの男は、「ッ」と何とも言えない顔で笑った。
――思い出し笑いに違いない。
ギリ、と城島は奥歯を噛み締めた。
このアイスのように純白な存在だったのに…。
しかし、少女がいつか大人の女性になってしまうのは仕方の無いこと。
諦め、城島は目の前のアイスを片付ける事を始めた。

ベッドから降りた途端にヨロヨロとしてしまった。
その原因を考えると、赤面どころか羞恥心で居たたまれなくなる。

昨夜。
絨毯の上で愛し合った後、汚れてしまった拓海を抱き上げ、
『洗ってあげるよ』
と一緒にお風呂に入った。
たぶん、拓海のことで知らないところは何も無いぐらいに、涼介に全部見られて、丁寧に洗われた。
恥ずかしくてガチガチで、けれどどこか甘ったるい空気のままお風呂を終えて、そして抱えられたまま今度は寝室に連れて行かれて…時間をかけて愛された。
実に濃密な時間を過ごしてしまったわけなのだが、拓海としては何もかもが初めての事だから、大人ってすごいんだな〜」と、こんなものなのかと思っていた。
目が覚めた瞬間に、おはよう」と涼介からキスの嵐。
恥しらい、逃げようとすると腰が立たず床の上に座り込んでしまった。
『大丈夫か、拓海？…フッ、昨日は無理をさせすぎたか…』
涼介に抱えられまたベッドに戻され、色気たっぷりの微笑のオマケ付きでまた赤面。
恥ずかしいけれど、幸せで。
何だかフワフワとした気持ちで涼介を見れば、これ以上ないくらいに彼は上機嫌に見えた。
ニコニコ笑顔で、ウキウキして見える。
——涼介さんも…嬉しかったんだな。
そう思うと拓海も嬉しい。
何も知らなくてツマンナイだろう自分なのに、こんなにも喜んでくれた。
それが嬉しくて誇らしくて、もっと頑張ろうと言う気持ちにもなる。
だからネクタイを締め、今から出勤しようとする涼介に拓海はベッドの上から「いってらっしゃい」の言葉と一緒にこう告げた。
『俺、もっと頑張るから、これからも涼介さんいっぱい教えてくださいね』
そしたら噛まれた。
『…お前…』
ガッと目を見開き、首にチュウと吸付いたかと思うと、ガブリと噛まれた。
まだヒリヒリするそこを、拓海は指で撫でた。
痛かった。けど、ゾクリと何かが戦慄いた。
不思議な感覚。
『……ああ。嫌って言うほどな』
大人の世界は奥が深い。
それに付いていけるのか不安を覚えるが、付いていかないと涼介に飽きられてしまうかも知れない。
それは嫌だ。
だから、頑張る。
拓海は勢いを付けてベッドから起き上がり、パジャマを着替えた。
まだ腰はヨロヨロするが、歩けないほどではない。

けれど。
「…なんか…へん」
まだ挟まってるみたいだ。
広げられた股関節も痛い。
ヨロヨロと歩きながら、リビングにまでたどり着き、今日は絨毯に座る気になれずソファに座る。
昨日はここで…と思い返した瞬間に赤面。
しかし視線がある一点を見つけた瞬間、真っ青になってしまった。
「こ、れ…血…」
真っ白な絨毯の上に、真っ赤な血の染み。
それが何なのか、一瞬で理解し、慌てて雑巾を手に拭いた。
けれど、時間を置いた血は取れない。
しかも体液まで付着していて…。
涙目でゴシゴシと絨毯を擦っていると、来客を告げるチャイムの音が鳴った。
誰だろう、と玄関の扉を開けるとそこには拓海の見知った人物がいた。
「よ、上手く行ったか？」
啓介さん！」
今回の密かな功労者である啓介だ。
それよりさ、メシ食わせてよ。俺、もう腹が減ってさぁ」
そう言われ、拓海は啓介を玄関からリビングへ通した。
けれど、その足元は覚束ない。
その様子を後ろから眺めながら、聞くまでもなく上手く行った事を啓介は知り、ほんの少しだけ苦い思いをした。
「今用意しますから」
「あ、悪い。無理しなくていいから！」
ソファに座り、落ち着いた瞬間に目に入ったのは、絨毯の上の不自然な雑巾。
「何だ、これ？」
と、雑巾を持ち上げ、啓介は固まりポトンと落とした。
フラフラとキッチンの拓海に向かい、言った。
「俺……帰る」
「え？でも、まだ…」
「や…いい。すげぇ胸ヤケしてる…」
「大丈夫ですか？あの、何か薬でも…」
「…うん。でも効かないと思うから、いい。じゃ」
そのまま出て行こうとする啓介に、あ、そうだと拓海は声をかける。
「啓介さん、ありがとうございます！俺、おかげで…」
しかし最後まで言うことは出来ず、涙声の啓介の
「いい！聞かなくても！見た！」
「見た？
ごちそうさん！」
食べてもいないのに、そう告げて帰った啓介に、拓海は首をかしげながら、またリビングに戻り、汚れの存在を思い出し、またゴシゴシ。
「…どうしよう。これ…」

真っ白な絨毯に赤い染み。
どんなに擦っても色は薄くなるが取れることはなく、拓海は途方に暮れた。

病院内で、高橋涼介が携帯を眺めながらニヤニヤしていると言う苦情を城島が受け付けたのは、夕刻の事だ。
携帯に何が映っているのか、非常に気になり、城島は言葉巧みに涼介を退室させ、携帯をこっそり盗み見た。
それは一見イチゴミルク。
真っ白な中に真っ赤な円。
それが何であるのか。城島は一分ほどの時間を要した。
気が付いた瞬間、パタリと何事も無かったように携帯を戻し、そして自分の机に戻り引き出しを開けた。
そこにはホワイトチョコとストロベリークリームのお菓子。
それを城島は乱暴に一口で飲み込み、そしてギラリと今から部屋に入って来るだろう男を待つように扉を睨んだ。
高橋涼介。残業決定」
ニヤリとほくそ笑み、またお菓子を丸呑み。
ガチャリと扉が開く。
先生、またお菓子ですか？」
ニコニコ、ピンクのオーラの男がそこにいた。

――END

★BOSS-PAN☆

http://www.geocities.jp/boss-nanya/top.html

なんや
boss-pan@mail.goo.ne.jp

2009.11.1

印刷：(有)スズトウシャドウ印刷

素材利用：http://ryusyou.fc2web.com